
魔弾の射手の弾丸は何処に？

緑一色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔弾の射手の弾丸は何処に？

【Zコード】

Z0526Q

【作者名】

緑一色

【あらすじ】

21XX年12月8日。第三次世界大戦勃発。

アメリカ、イギリス、ロシア、中国などの強豪国を破り勝利したのはサムライの国日本だった。

初の学園物です。末永く見守ってください

題名変えました。

元・魔弾の射手と素晴らしい世界です

21××年12月8日（前書き）

初の学園物スタート！！

妖怪退治が主流になると想います

21XX年12月8日

21XX年12月8日。何の因果か真珠湾攻撃と同日、第三次世界大戦勃発。

ロシア、アメリカ、イギリス、中国等の強豪国を退け戦争に勝利したのはサムライの国日本だった。

日本は火器を全く使わずにこの戦争で勝利し、多大な領地を手に入れた。

なぜそんなことが可能だったのか？

それは相手国にも日本国民にも知る者は少ない。

11年後・・・

日本中の至る学校にある組織が置かれた。その名も「？」。

略して「？」と呼ばれている。

その概要是謎に包まれており、今や都市伝説と化している。

「ってね、そんなに大したものじゃないのに」

そう言つて指で鍵をクルクル回している少女は津田佳奈。

髪型は黒髪のショートヘアで服装は飯島高校の制服のセーラー服。
世間一般的な物で探せばどこにでもありそうである。
パツチリと開いた大きな皿はどこか宙を見ている。

「佳奈はあの化け物を焼いてるだけなの?」

「それだそれ

黒髪の相棒の少年は欠伸をして返す。

少年の名は鎌田龍樹。

同じく服装は飯島高校の男子の制服である夜の闇に溶けていきそう

なほじの黒の学ランに黒のズボン。

顔はかつこないわけではないがかといつて醜くもない。
腰するに中の中である。

「何で！？あの化け物を焼くことのどーが？」

「俺が言いたいのはそんな口調で話す女がいるから政府も大っぴらにできないことだ」

「ひどーーーまるで佳奈が女じやないみたいじゃん

「みたいじやなくてその通りだ。・・・・・・・と、ここか」

佳奈から鍵を奪い取り、龍樹は田の前の建物の扉を開けた。

建物は今では廃部となつた飯島高校野球部の部室だ。

扉を開けた瞬間、子犬くらいの大きさの生物がキイツと金切り声を上げながら龍樹に飛びかかってきた。

龍樹は驚きながらもそれをかわした。

「危なつ

「やつぱじ、ゴブリン。でも何で外国のが？」

不思議そつそつ眩いで佳奈はゴブリンの首を掴み、持ち上げた。

「ゴブリンはじたばたと手足をばたつかせている。

突如、ゴブリンの体は炎に包まれた。

ゴブリンは身を焼かれ、消し炭となつた。

「よし、仕事終わり。龍樹、帰りに何かおごつて

「肉まんならな」

そう言つて一人は野球部部室を後にした。

あとは部室前に炭化したゴブリンが残されていただけだった。

帰り道、佳奈は龍樹に尋ねた。

「ねえ、あれは何をしたの？」

「別に何もしてねえんじゃねえ？何だ今頃同情か？」

「それもちょっとね。ただ可愛かつたからちょっと飼つてみたかつたな～って」

「悪趣味な奴だ」

「あっ、コンビニ。早く肉まん肉まん！」

龍樹の苦情を無視して、佳奈は一人でコンビニに走つて行った。
龍樹も渋々後を追つた。

「やつぱあんまんこしてこい？」

すると、コンビニから出てきた佳奈が叫んだ。

七人ミサキ（1）～飯島高校の日常～（前書き）

作中のM102BはM92Fで
mac15はmac11のイメージです。

七人ミニサキ（1）～飯島高校の日常～

高校2年生の鎌田龍樹は飯島高校2-Cで宿題に没頭していた。

「よひ、リューちゃん。今頃宿題か？」

そういつて龍樹の肩に手を乗せた軽い雰囲気の少年は一宮耕治。このみやこうじ

耕治は龍樹と中学からの親友である。

といつても、その仲は複雑なものだが。

「まあな。昨日も駆り出された」

「またお化け退治かよ。大変だな正義の味方も」

龍樹がじろりと耕治を睨んだ。それを見て耕治はバツが悪そうに続
けた。

「分かつてる。リューちゃんのことは誰にも言わんさ。大体、俺自
身のことどが無ければリューちゃんのことなんか絶対分からなかつ
たぜ？」

「そうしてくれ」

龍樹がそう言葉を返してからすぐの事だった。

何人かの男子生徒が龍樹と耕治を取り囲んだ。

逃げられないように四方八方を塞いでいる。

リーダー格の少年が口を開いた。

「勉強か？ 真面目くーん」

「あちゃあ、高田君！」一 行が

耕治はおどけながらそう言つた。

リーダー格の少年・・・高田は拳銃を龍樹のこめかみに突きつけた。
「やついう眞面目な態度、俺大嫌いなんだよね」

高田とその一味はクククッと笑いだした。

他のクラスメイトはそこから一気に距離を置いた。

「あつそ。だから留年するんだろ、苦学生」

ちなみに、高田は本来もつ3年生のクラスにいるはずの年齢である。

龍樹は高田に田も向けずに計算式を解き続ける。

その澄ました態度に対して、高田は激昂した。

「てめ、俺は撃てる男だぞ？おい！」

「・・・・・ M102B。M92Fの改良に改良を重ねた結果がこれか。ベレッタの名も随分と落ちたな」

龍樹は冷静に銃の分析をしてそのままの調子で続けた。

「どうでもいいが安全装置^{セーフティ}くらい外したりどうだ？」

「なつ・・・・・」

高田が自らの愛銃を顔に寄せたのを龍樹は見逃さなかつた。

龍樹は愛銃のグロツク17学生カバンから取り出し、高田の額に突きつけて引き金を引いた。

乾いた音が教室中に鳴り響く。

クラスメイト全員が口をポカンと開けている。

唯一、無表情なのは龍樹と耕治くらいのものだらう。

当の高田は白目を剥き、大口を開けて倒れ込んでいる。

「あー、空砲空砲。先生には適当に言つといで。あとそこの部下達はそいつ席に座らして」

パンパンと手を叩きながら耕治は場を仕切り始めた。

発砲音を聞いて駆けつけてきた教師に1人の男子生徒が嘘の説明を始めた。

部下達は負け惜しみを咳きながら高田を席まで引きずつて行つた。

「悪いな」

「良いってことよ。俺はサポートでさ」

「人望はお前の方があるだろ?」

「もうちょい口数増やせばリューちゃんだつて・・・」

担任の男性教師が教室に入ってきたのを見計らつて耕治は自分の席に戻つた。

担任が空砲を撃ち、生徒達に黙るように促した。

銃刀法。それは戦後の日本では完全に死語だった。

今や小学生でも防犯ブザー代わりにサバイバルナイフとm a c 15で武装する。

そんな世の中である。

「ねえ、鎌田君」

「ああ?」

龍樹は2限目の後の昼寝の時間（個人的なもの）が何よりも好きである。

それを邪魔されたからか口調もきつくなっている。

「鎌田君は妖怪の居場所って知ってる？」

質問の主は龍樹の同学年の三沢恵子みさわけいこだった。

恵子は学年で一番背が低いので一部の男子から強烈な支持を受けている。

もちろんロリコン的な意味でだ。

15

もっとも龍樹はそんなことには興味はない。
ただ単にクラスでも浮いてる存在の自分にそんなことをなぜ聞いたのか驚いた。

「知つても教えねえよ。んな危険な場所」「そつか・・・・・」

「何で俺に聞いたんだ？お前、もっと仲良くてそういう情報に敏感な友達いるだろ？」「でも、佳奈ちゃんが鎌田君は詳しつて言つてたから」「あの馬鹿・・・・・」

そう言つて龍樹は頭を抱えた。

去つていいく恵子に龍樹は声をかけた。

「お袋さんの命日だつたな。今日」

恵子が足を止めて振り返らずに答えた。

「覚えててくれたんだ。ありがとう」

「まあな。1年の時、結構衝撃的だつたからよ

「うん。あの時は『じめん』」

「親が死んだり泣くのが普通だ。あそこで異常だつた（・・・・・）
のは俺だけだ」

恵子はその言葉に向も返さず無言で教室から出て行った。

その背中は少し悲しげだった。

七人ミサキ（2）～恵子の回想と裏山～

恵子は泣いていた。今は動かなくなつた母の目の前で。

恵子は泣いていた。大勢のクラスメイトと親族の目の前で。

一人の少年が声を発した。

「たかが人が一人死んだ。何が悲しいんだ？」

恵子は睨んだ。少年の顔を。

恵子は怒りのあまり母の位牌を投げつけた。少年に向かつて。

少年は頭から血を流しているというのに無表情だった。恵子はまた泣いた。

「山羊の頭、猿の脳、狐の尾・・・」「

恵子は薄暗い部屋のテーブル一面に置いてある物の名称を復唱していく。

「あとね・・・」

恵子はパソコンの画面に目を移した。

「妖怪の肉だけ」

恵子は様々なおどりおどりしい物の前で泣き始めた。

「お母さん、待つて。あとちょっとだから・・・あとちょっと」

三沢恵子は物心ついた時から父の顔を知らない。

母親一人に育てられてきた。

兄妹はおらず、母は恵子を目に入れても痛くない程可愛がった。

そうやって恵子はすくすく成長していった。

しかし、娘の成長に比例して母の苦労は増える一方だつた。
その為、母は朝から晩まで休まず働いた。

いずれ体も心も壊れるのは誰の目から見ても明らかだつた。
そして、母は恵子が高校1年生の6月、しどしと雨の降る日に心
不全で亡くなつた。

——放課後・帰り道——

「で、恵子ちゃんにちゃんと教えてあげたか?色男」

そう言つて佳奈は龍樹の頬を突いた。

だが、龍樹は何の反応も示さない。

後ろから耕治は声をかけた。

「多分教えてないだろうな。こいつ硬派だから」「教える必要が無い。大体、そんな危険な事教えるか」「

少し気難しい声で龍樹は言つた。

「大丈夫だよ。今この辺そんなにヤバいのいないし」「つと」

耕治は慌てて耳を塞いだ。

その手の話は聞くなど龍樹に釘を刺されていたからである。

「それでもこいつみたいに俺らの事がバレると厄介だろ」「耕治も?入つたら?」

耕治は大げさに首を横に振つた。

「・・・・耳塞いだ意味ねえだろ」

「うつ・・・・・ むーで、じゃ、じゃあ俺はこの辺で。バイバーイ」

耕治は逃げるよう元10m先の路地を曲がって走って行った。

「耕治本当は入りたいんだろ？ うね」

「そりだらうな・・・・・と、メールだ」

龍樹は携帯を開き、メールの確認を始めた。

15秒もしないうちに佳奈の携帯にもメールが届いた。

「ふーん。今度は泥田坊だつてさ」

「あの人メールの早打ちは異常だな」

「何で？ 一斉送信したんじゃないの？」

「俺の方には裏山に厄介なのが出たから人払いをしろだと」「厄介なのつて？」

「ミサキ」

「あららら・・・・・ドンマイ」

そんな話をしながら一人が辿り着いたのはN?専用の寮。

裏・風紀委員の存在は政府から認定されてはいる。

だが、その支援は微々たるものである。

よつて、部屋は1DKの簡素なものになつてゐる。

寮の部屋は全部で8つ。

6つは使われていて残り2つは空き部屋である。

そして、使われている部屋の内の2つは佳奈と龍樹のものである。
佳奈と龍樹はそれぞれの部屋へと入って行った。

七人ミサキ（3）～長い夜～

その日の夜、龍樹は裏山での仕事を終え、木陰で一息ついていたところだった。

「はあ、疲れた」

龍樹の仕事は裏山の人払い。

面倒そうな仕事に聞こえるが作業自体は至って簡単だ。

全部で9つの『熊が出たので今日から4日間山に入らないでください』と書かれた立て札を入口も含め人が入れそうな所に立てるだけの仕事である。

「あとは、中を適当に巡回すれば文句は言われないだろ」

そう呟き龍樹は自分で立てた立て札の文句を無視して山へと踏み込んでいった。

「あいつ、何してやがったんだ？」

高田は龍樹が山に入つて行くのを陰から見届けた。

そのまま龍樹が先ほどまで休んでいた木陰に高田は近づいた。
「熊？こんな看板立てるだけのバイトあるのかよ」

高田は看板を蹴り倒し、一人でニヤけた。

「まあどうでもいい。俺に恥かせたあいつだけは許せねえ。殺してやる」

高田は腰のM102Bに手を掛け、龍樹を追つた。

龍樹は山道を通り巡回を始めた。

当然、一般人の被害を少しでも減らす為である。

前を懐中電灯で照らしながら歩いていると茂みに何かいるのが分かつた。

龍樹はヒップホルスターからグロックを抜き、茂みに向かって3発撃つた。

「ひゃあああああっ……」

茂みから悲鳴を上げながら龍樹の良く見知った人物が飛び出してきた。

「何やつてんだ？」

「あ・・・・・ 鎌田くん」

恵子は龍樹に表情の固い笑みを見せた。

ため息をつき、龍樹は恵子に再度尋ねた。

「もう一度聞いへ。何やつてんだ?」今は今、立ち入り禁止だぞ」「鎌田くんこいつ何やつてるの?」

「俺は・・・・・バイトだ」

相変わらず嘘を吐くのが下手な男だ。
そう思い、龍樹は自嘲気味に笑った。

しかし、恵子はそれで信じてくれた。

「そつか。・・・・・」めん鎌田くん。見逃してくれない?
「何でだ?こんなところ何の用がある?」
「そ、それは」

その時だった。

シャン　シャン　シャン

全部で七つの鈴の音が龍樹の背後から聞こえてきた。

「やせ。三沢、ちょっと隠れてね」

「え? 何? 何なのこの音」

「ここから向ひ向けー!」

しかし、恵子は何かに気付くと漠然とした表情で龍樹の背後のある
一点を見つめてくる。

シャン シャン シャン

鈴の音はすぐ後ろに迫っていた。

龍樹はゆっくりと振り向き、音の方向を照らした。

シャン

そこには七人の山伏がいた。

いや、山伏の恰好をしたものたち（・・・・）がいた。

これが七人ミサキだということは例えその存在を知らぬ者でもわかるだろう。

服装は至つて綺麗だったが顔は肉が爛れて骨が所々見えているのがほとんどである。

列の一一番後ろの損傷が一番少ないミサキが声を上げた。

「ミサキ……」「一…………力…………マ…………」

タ――！」

「高田！？何であいつが

「ねえ、何なの鎌田くん。何で高田くんあんな恰好してるの？」

今にも泣きだしそうな声で恵子は龍樹に尋ねた。

その問いを無視して龍樹は学生カバンからショットガン、ソードオフのM870を出し、すぐそこまで迫っていた七人ミサキの行列の先頭のミサキに片手撃ちで一発。

ミサキの腹に風穴が開き、先頭のミサキは後ろに倒れ込んだ。

それによつて後ろを歩いていたミサキを将棋倒しの要領で次々倒れた。

「逃げるぞーー！」

恵子の返事も待たず、龍樹は彼女の手を取り、その場を離れた。

七人ミサキ（4）～商品名がミエル～

龍樹と恵子は七人ミサキから出来る限り離れた場所で座り込んだ。

落ち着いてからまず恵子が龍樹に尋ねた。

「あれは何なの？妖怪ってことは分かるけど」

「七人ミサキ。常に七人組で行動し、人間を見つけると追いかけてくる」

「それだけ？」

「な訳ないだろ。捕まつたら即死！」一番先頭のミサキが消える代わりに一番後ろに捕まつた人間がミサキとして並び彷徨い続ける。全く面倒な奴らだ」

そう言つて龍樹はM870のスライドを引き、空薬莢を排出してから12ゲージ弾を一発込めた。

恵子は龍樹の説明で高田が何故あそこにいたかを理解した。

不安そうな表情の恵子を見て龍樹は続けた。

「大丈夫だ。鈴の音で向こうの位置は分かるし奴らはのろい」

「そつか・・・・・もつこい？」

「何だ？」

「何でそんな古い銃使つてんの？」

「俺の悪友が好きなんだよ。レトロな銃」

これは半分嘘で半分本當である。確かに？の副委員長はレトロな銃が好きでよくそれに関する物を作ってくれたりする。もつともこれは副委員長がレトロな銃しか改造したくないと「うわがままのせいだが・・・・・・。

だが、銃そのものは業者から買つていてる。

前にも述べたように裏・風紀委員への援助は少ない。よつて、単純に安い旧式のものを使つてているといつた次第である。

今度は龍樹が尋ねた。

「じゃあ今度は俺の番だ。何しに来た？」などといふ

恵子は一瞬、躊躇つたがやがて淡々と語り始めた。
「分かつた。言つよ。・・・・・お母さんを生き返させるんだ

「人体生成か」

「そう」

人体生成。

古来から妖怪には不思議な力が備わっていると信じられてきた。有名な所でいえば、人魚の肉を食べれば不老不死になれる等、たくさんの逸話が残っている。

その妖怪の肉を使って死んだ人間を生き返らせるといつ話を龍樹も聞いたことがある。

「そんなもの本気で信じてるのか？」

恵子はムキになつて反論した。

「お母さんが戻つてくるならどんなことでも信じるー。」

「ふーん。・・・そうか」

龍樹は興味無さそうにそつ返すと視線を自分の学生カバンへと移した。

そして、カバンから古びたコルトSAAと赤い弾頭のコルト弾を一つ取りだした。

SAAはそのまま右手に持ち、コルト弾はポケットへと仕舞われた。

「まあ、仕方ない。これで一気に決めるか

七人ミサキは動きを止めた。

前方に獲物がいたからである。

シャン シャン シャン

「セヒト。三沢、頼むぞ」

龍樹はSAAのハンマーを下ろした。

恵子は龍樹の持っていた懐中電灯で七人ミサキを照らした。
七人ミサキはこちらから見て横にほぼ一列に並んでいた。

まず恵子が照らした一番左端のミサキに一発。

弾はミサキの心臓部へと吸い込まれていく。

「アギヤアアアアッ！」

ミサキはこの世のものとは思えない叫び声を上げて砂とも塵とも似つかないようなものに変わり、消えた。

龍樹がまたハンマーを下ろす。

シリンドラーが回る。

「次頼むー！」

恵子はさつき消えていったミサキのすぐ右隣りのミサキへと光を当てる。

すると、ミサキ達は鈴の音を響かせながらこちらへと前進を始めた。
「力・・・・・マ・・・・・・・ター」

元・高田が龍樹の名前を呼びながらひつくりとした足取りで近づいてくる。

一匹一匹端から順に龍樹はミサキを撃ち殺していく。

しかし、S A Aの装弾数は6発、相手は7匹。

それが何を意味するか恵子は龍樹が6匹田のミサキを撃ち殺した時に気付いた。

「鎌田くん逃げて！！」

「カマタアアアー！」

龍樹が空薬莢を排出し、赤い弾頭のコルト弾を1発装填した時、最後のミサキである元・高田は龍樹に抱きつこうと両腕を伸ばしていた。

恵子は龍樹のそして自分の死を身近に感じた。

が、その感覚は杞憂であったことに後々気付く。

SAAの発砲音より一際大きな発砲音と共に元・高田の体は宙を舞つた。

まるで映画のワンシーンのようにして景色がスローモーションで動いているかのように恵子には感じられた。

元・高田は地に着いた後も2m程転がって行った。

龍樹の左手にはM870が握られている。
これで吹き飛ばしたのだろう。

「悪いな。言い忘れたが俺は両利きなんだ。・・・・安心しろ
三沢、今までの6発はフェイクだ。7発目こそが魔弾だ」

恵子は魔弾の射手を知らないので意味が分からなかつたが、自分の安全だけは保障された気がした。

「商品詮札//エル・・・発射」

SAAの銃口から放たれた赤い弾頭のコルト弾は元・高田の心臓部へと吸い込まれていった。

しかし、弾は動きを止める事を知らない。

そのまま方向転換し、元・高田の体中を駆け巡った。

「ア・・・・・力・・・・・マ」

元・高田は呂律が回らず訳の分からない声を上げて後ろに仰向けに倒れ込んだ。

「Fake sixは妖怪の核を的確に射抜くのに対し、ザミエルは妖怪の核の周囲で同心円状に運動を繰り返す。勢いそのままでな。むごいもんだ」

核というのは妖怪の心臓に当たる部位のことである。

Fake sixはその核が発する微弱な電波に反応して核を確實に射抜く。

それに対してザミエルはその微弱な電波に乗り、電波の動きと同じ

同心円状の運動を続ける。

だが、核は破壊されない限り電波を発することを止めない。

といつても、妖怪とて人間より生命力が強いといつてもある程度の傷を負つたら死ぬ。

だが、コルト弾程度の大きさの弾丸の威力で殺せる程ではない。妖怪にとつてはまさに生き地獄である。

しだいに元・高田の体中から真っ赤な液体が流れ始めた。これは妖怪の血に当たるものである。

妖怪であろうともその体のベースは生物と一緒になのだ。

それとほぼ同時にザミエルも動きを止めた（核の活動が止まつた訳ではなく、ただ単に弾丸の勢いが死んだからである）。

龍樹はその光景をただただ眺めていた。

七人ミサキ（5）～究極の一挙～

龍樹の冷たい反応に対して恵子は地べたにへたり込み、体を小刻みに震わせていた。

「どうした？お前が待ち望んでいた妖怪の肉だ。安心しろ、かなり弱ってる。こいつはもうほとんど人間と変わらん」

その言葉に恵子は更に体を震わせた。

龍樹は構わず続ける。

「そもそも七人ミサキは七人だからこそ意味がある訳で、こいつ一匹ならおとなしいもんだ。さあ、早く肉を取れ。ナイフくらい持つてきてるだろ？」

恵子は怯えた表情で首を横に振り、否定の意を示した。

「い・・・・・嫌」

「何が嫌なんだ？これがお前の望んだ結末だろ？」

龍樹は声の調子、表情、恐らく心拍数ですら変えずに言い放った。

たまらず恵子の反論が始まった。

「だつて、これは妖怪じゃなくて高田くんじゃない！」

「元な」

「でも、鎌田くんのことも私の事も」

「そりや妖怪になつてまだ1時間も経つてないから記憶くらうにある
だろ」

「大体、死体を切り刻むなんて死者への冒涜だよ……」

「じゃあ眠つている死者を無理やり生き返らせるのは死者への冒涜
じゃないのか？」

恵子は言葉に詰まつた。

核心を突かれ唇を噛みしめている恵子に向かつて龍樹は続けた。

「いいか。究極の一択なんて難しいものじゃねえんだよ、これは。
ここで痛みに苦しみながら消えていく高田を看取るのもお前のお袋
さんを生き返らせるのもどっちもわざと言つた死者への冒涜って奴
だろ？ だったら高田は楽にさせてやり、それでいてお前のお袋さん
は生き返る。それが一番いいだろ。これ以上とない究極の一択だと
思つが？」

恵子はまるで雷に打たれたかのように驚愕し、思いつめた。

自分のしようとしていることがどれだけ愚かな事だったのかがよう
やく分かつた。

もつとも龍樹はそれを悟らせる為にそんな事を言つたわけでは無さ
うだが。

そして、恵子は涙を流しながら元・高田のすぐ傍に座りこんだ。

ナイフを固く握り直した恵子はもう一度、高田の苦痛に満ちた顔を見つめた。

三・・・・・サ・・・・・ワ一・・・・・

恵子は何度も妖怪に向かつて刃を振り下ろした。

肉の抉られるあの独特の音は恵子の耳に一生残るだろう。

元・高田の体は小柄な一人の少女に200gにも満たない肉片を残して消えていった。

「で、結局お母さんはどうなったの？」

セーラー服に身を包んだ佳奈が龍樹に尋ねる。

「さあ。大体あいつ一昨日から学校に来てねえじゃねえか」
龍樹はそう返してこの話題には似つかない程の晴れ渡つた青空を見つめた。

雲ひとつない快晴である。

「あ！」

佳奈が思わず感情的な声を上げた。

視線の先にあったのは優しそうな母に見送られて登校する二沢恵子の姿だった。

恵子は一いつ気に付くと逃げるよつて学校へと走り去つて行った。
恵子の母は一いつ気に付くと軽く会釈をしてきた。
龍樹、佳奈共に同じ要領で会釈を返す。

しばらくの沈黙の後、佳奈が重々しく口を開いた。

「成功したんだね」

「ああ

「・・・・・ねえ、これで良かつたの?」

「俺には今考えてもこれ以上の結果が考えつかねえ」

「恵子ちゃんは幸せなの?」

「・・・・・それはあいつが決めることだ。俺達には関係ない」

路地から出てきた黒猫が龍樹へ非難の声を浴びせるかのよつて「一

ヤー」と短く鳴いた。

七人ミサキ（5）～究極の一挙～（後書き）

はい、これにて七人ミサキ編終わりです。

皆さまどうだつたでしょうか？

この作品を書いてて思ったのが銃撃戦の表現が難しい！

変な部分があつたらまた是非教えてください

幕間～江本直哉の挨拶回り～

龍樹は飯島高校校舎の3階を歩いているところだった。

理由はただ一つ、委員長命令だからである。（乙は学校では委員会として扱われている）

委員長の名は根来いずみ。
まいにい

いつものほんとした雰囲気を漂わせている眼鏡をかけた龍樹の1つ上の先輩である。

そして、龍樹はいづみの待つ第三会議室の前で立ち止めていた。

「あの人命令だからな・・・・何頼まれるか」
龍樹は意を決して横開きの扉を開け、中へと入った。

「失礼します」

「いらっしゃ～い」

間延びした声が教室中に響いた。

龍樹の机の前には、一ノ一ノと微笑んでいるはずみとその脇に見事の無い茶髪の少年が座っていた。

「久しぶりねえ。龍樹くん」

「お久しぶりです」

「メールも返してくれないから心配したのよ～」

「七人ミサキが出たつていうメールに返信をしようと～」

「うん。私としては、まあ、そんなことよつここの子に学校案内してあげて」

そう言つていづみは茶髪の少年の頭を軽く2回撫でた。

氣恥ずかしさからくるのか少年は頬を赤らめて下を向いた。

「そいつは？」

「ここに転校してきた1年生の江本直哉くん」

直哉は立ち上がり、良く通る声で龍樹に自己紹介を始めた。

「江本といいます。よろしくお願ひします」

直哉の堅苦しい挨拶を見て龍樹は顔をしかめた。

「江本くんは両親を不慮の事故で亡くして此処に来たの。で、中学の頃クレー射撃が得意だったそつだから戦闘要員に入れようかと思つて」

「いや、それはいいんですけど俺より暇な奴は？」

「私は雑務があるし、翔良くんも佳奈ちゃんも連絡つかないし、零治くんは私が苦手だから～・・・あと剛太くんは例によつていないし」

「今個人的な理由ありませんでした？」

「とにかく龍樹くんよろしくね～」

いずみは直哉を無理やり押し付け、笑顔を浮かべながら自分は会議室から出て行つてしまつた。

龍樹はため息をつき、直哉を見据えた。
直哉は反射的に龍樹に頭を下げた。

「宜しくお願いします」

「ああ。・・・・・で、どこまで聞いてる？」

「N?が孤児の集まる場所つてところまでは」

第三次世界大戦の後、日本中の養護施設は姿を消した。それこそが
N?の始まりだった。

天涯孤独となつた孤児達は国の命令でN?に入る。

N?の仕事は小学生の頃から与えられる。
と言つても小学校での仕事は妖怪のデータを頭に入れたりするだけで戦闘訓練は行わない。

中学校に進学すると部活代わりに弱い妖怪との実戦である。

その後高校に進学しない者はそのまま一生国の兵隊となり、進学する者は高校でも妖怪退治である。

彼らは本来なら放つておいても死んでいたいわば社会的死者であるため、死んでも誰にも損害は無いし誰も傷つかない。
少年兵の前例もある為、周囲からの反感も少ない。
危険な仕事には適任な訳である。

偶然身寄りが無くなつた。

偶然親に捨てられた。

偶然不幸な星の下に生まれた。

たつたそれだけで人は國の人形になつてしまつ。

「それだけ聞いてりや充分だ。さて、まずは副委員長に挨拶に行くぞ」

龍樹は直哉を待たずに一人で会議室を出た。
慌てて直哉もその後を追つた。

「こんな所で何するつもりなんですか？」

先ほどから直哉の問いかこと「」とく無視されている。

龍樹はずっと床のタイルを丁寧に一枚一枚蹴っている。

今2人がいるのは数学教室。

その名の通り、数学の教材が所せましと置かれている。

ふと龍樹が一枚のタイルを蹴つて何かに気付いたかのような顔を作った。

「どうしたんですか？」

「少し待っててくれ」

そう言って、龍樹は床のタイルに手を掛けた。

そして、その手を思いつきり引いた。

ベリベリといづ音と共にタイルは剥がれた。

「ちよつ……何を

タイルの下に広がっているのはコンクリートの床。のはずだった。

タイルの下には穴が出来ており、しかも穴から僅かだが明かりが漏れている。

龍樹は躊躇わずに床下へと下りて行つた。

「おーい、邪魔するぞ。直哉も下りてこい」
「えつ・・・・・はい」

直哉も龍樹に続いて床下へと飛び降りた。

しかし、直哉は地面までの距離が意外と深い事を知らず尻もちをついた。

「痛つ・・・・・」

直哉が床下で目にした光景は信じられないものだった。

黒のソファに天井からぶら下がる蛍光灯。
TVまであった。

そして、黒のソファには背の高い色白の少年が座っていた。

少年は座つたまま陽気な声で言つた。

「ようこそ今井銃器店へ！……………つて、一見さんか」「ああ、新入りだ」

「へえ、そつかそつか。俺は2-Aの今井翔良。^{いまことら}N?の副委員長であり今井銃器店の店長もある。ようじく！…」

翔良はそう言い終えると直哉にそつと何かを手渡した。

「何ですかこれ……………クーポン？」

「イエス！そいつがあれば一部のハンドガンが半額。弾とセットで買つ時はスペアマガジンが付いてくるという優れもの！お友達にも2、3枚渡してやって！でも教師は勘弁で」

一息でそう言い終えると翔良は力々かと豪快に笑い始めた。そして、そのまま続けた。

「で、何の用？」

「一つはこの新入りの挨拶回り。もう一つは俺の依頼だ」

「どうせ F a k e S i x だろ？」

「ザミエルもな」

「あれを使つたか。どうだつた？」

「最高だつたぜ」

「そつか。……………まあ、一週間以内には作つとくわ。金は作り終えてからで」

「頼んだぞ。さて、次に行くぞ直哉」

そう言つて龍樹はさつき入った穴から下がつているロープを伝つて上へと登り始めた。

「・・・・・あれ？ それの存在言つてくれてもよかつたんじゃないですか？」

直哉は誰か（・・）にそう言つて自分も龍樹の後に続いた。

――飯島高校3階・廊下――

「何だ男か」

長井零治ながいれいじが龍樹と直哉を見て発した一言にそそれだった。

金髪、青い瞳、高い鼻。一瞬、外国人と見間違える程の整った顔立ちである。

しかし、その性格は俗に言う不細工と呼ばれるものであった。

男性に対しては厳しく女性には優しく。

彼のそのポリシーが行き過ぎた物であることは言わばとも分かるだるべ。

「悪いが男と話す事は無い。帰れ」

「俺が女装して来たらどうすんだよ？」

「するのか？」

龍樹は言葉を返せなかつた。

その様子を不安げに見ていた直哉は自分から自己紹介を始めた。

「一年の江本直哉と言います。よろしくお

「興味なし。顔はもう覚えたから結構だ」

やがて零治は龍樹と直哉の前を足早に通り過ぎて行つた。

直哉はただそれを見送ることしか出来なかつた。

しばらくして何とか直哉は口を開いた。

「変わった人ですね……」

「まあな。ああこいつ奴なんだ。気にするな。腕は確かなんだがな・・・

・・・・・

龍樹はそう言い終えると凹々しげに頭を搔き鬯つた。

「あとほ・・・・・・・・・

「佳奈つて人か剛太つて人ですね」

「いや、どちらも止めた方がいいな

「何でー!?

直哉は驚愕の表情を浮かべたまま龍樹に目を向けた。

「まず、剛太先輩はどこにいるか分からん。佳奈は・・・・・・今田は(・・・)止めた方がいい

「何ですか? 今日はって」

直哉は明らかに今までとは違う龍樹の様子に少し不安を覚えたが、こういふのはしっかりやった方が良いと言つもう一人の自分の心の声に後押しされて尚も食いつ下がつた。

その声と共に龍樹は恐怖から肩を震わせた。

「あつ、龍樹だ!」

ゆっくりと振り返った龍樹が田にしたのは津田佳奈の姿だった。

直哉はその姿にしばらく見惚れていた。
佳奈はいざみとはまた違つた魅力が溢れているように直哉には思えた。

「今日、金曜だつたよね」

「そ、そうだな」

龍樹はぎこちなく返事をした。

直哉はそこに入つて自己紹介を始めた。

「新しくN?に入った江本直哉と言います!宜しくお願ひします!」

「！」

心なしか翔良や零治の時より直哉の声は元氣がある。

「新入りか~。よろしくね、直哉くん」

「はい!~」

龍樹は直哉が佳奈に抱いている感情を瞬時に察知し、直哉を佳奈から少し離れた所に引っ張つて行つた。そして、直哉に小声で忠告をした。

「やめろ、本当にあいつだけはやめろ」

直哉も小声で反論する。

「何ですか！後輩の純真な恋をじやまするんですか？」

「純真じうじうの問題じゃねえ。てか、お前そんなキャラなのか！」

？

「はい……」

「いいか、あいつは

「何の話してんの？」

佳奈が龍樹の肩に手を置いた。

その所為で龍樹は続く言葉が発せなかつた。

おそらく佳奈は龍樹の続く言葉を止める為にそのようなことをした訳ではないだろ？

天然。

龍樹はその言葉が最も似合つ裏・風紀委員は佳奈だと思つてゐる。

「いや…………大した話じやない」

「そつか。で、今日は何おじつてくれんの？」

佳奈は目を輝かせてやつ言ひ。

龍樹はその視線から逃れる様に目を泳がせながら返す。

「きょ、今日か～。ヘルシーにラーメンとかどうだ？」

「全然ヘルシーじゃないしもつと良い物食べたい」

「えー…………じゃあ

直哉は渋る龍樹を見てある考えが浮かんだ。

直哉はその考えをそのまま言葉にした。

「俺が奢りますよ」

「えつ、いいの？」

佳奈の田の輝きは一瞬で直哉に向けられた。直哉はそこから机に攻めの姿勢を見せた。

「いいですよ。親交の証です」とこいつよつ

続く言葉を龍樹が遮った。

「やめろ、お前はこいつの秘密を知らないんだ！」

「止めないでください龍樹先輩！」

佳奈先輩行きましょっ！」

龍樹はそれ以上止める事をやめた。

その顔には諦めの色が浮かんでいた。

「いいけど佳奈結構食べるよ？」

「大丈夫です任せてくれ下さい！」

直哉は自信たっぷりの声でそう言つて佳奈の手を取り、走り出した。龍樹は彼らを止めなかつた罪悪感に苛まれたが後の祭りだつた。

金曜日。佳奈ことひでは吉田。龍樹ことひでは岡田。

ちなみに飯島高校近くの高級焼き肉店で約12万円分の肉を食べたカップルがいたという伝説は今もなお語り継がれている。

同時期に乙女の寮の空き部屋から泣き声が聞こえるところ怪談も裏・風紀委員の間で語り継がれていた。
その空き部屋こそ江本直哉の自室であった。

かまいたち（一）～一陣の風～（前書き）

かまいたち編スタート

かまいたち（1）～一陣の風～

某月某日 PM9：00

男の店の営業時間は午後9時まで。男は店先に掛けたる札をOPENからCLOSEに裏返した。

これで男の本日の仕事は終わりである。

「はあ、今日も疲れたなあ。年には勝てん」

まだまだ男が経営する『人形店』『三円堂』の青の制服姿を見てもまるで中年のよつた台詞を齒いているが男はまだ三十路を迎えてすらいない。

まだまだ男が経営する『人形店』『三円堂』の青の制服姿を見ても不自然には感じられない。
といつても三円堂の店員は店長兼店員のこの男とその妻だけなのだ
が。

ふと、とてつもない強風が吹いた。
店の看板が音を立てて落下する。

そう呟きながら男は落ちた看板を一旦別の場所に置いておこうと考えた。

「つたへ・・・・・・ん?」
明日にでももう一度直しておけばいいだのうといふ考えだった。

男は違和感を覚えた。

看板を持ちあげるには当然両腕を使つ。

だが、右腕の感覚が妙である。

男は右肩から右手に掛けた左の人差し指をゆっくりと滑らせる。

違和感の正体は肘から下の部位の消失だった。

「あ」

また強風が吹いた。

男の首は宙を舞い、堅いコンクリートの上に落下した。

彼が最後に呼ぼうとしたのは店の名か妻の名かはたまた娘の名か。

今となつては誰にもわからない。

龍樹は皿らの愛銃であるグロシクーフを入念に手入れしていた。その表情はまさに喜色満面であり、鼻歌でも口ずさみ始めそうである。

「相変わらず古いの好きだね。リューちゃんは」

「ヤニヤしながら龍樹の手元を覗き込むのはやはり耕治だった。龍樹の表情が一瞬で曇る。

「何の用だ？」

「つと、ごめんごめん。忘れてないって銃の手入れ中は話しかけるなってのは。でも、あちらの方が用があるみたいでさ」

龍樹が耕治の指さす方に目を向けると横開きのドアに翔良がもたれかかっていた。

翔良は龍樹の視線に気づくと手招きした。

「今井も？なのか？ガンアクション出来るようには見えねえけど」「まあ、翔良は基本武器の発明が仕事だからな」

龍樹はそう返して翔良の元へと歩き始めた。
だが耕治は龍樹の後にピッタリと歩いてくる。

「着いてくるな」

「ふふふ。何で着いてくるか知りたいか？」

「いや、遠慮しとく」

「それはな」

「聞いちゃいねえ」

耕治はポケットから一枚のA4サイズの折りたたまれた紙を取り出し、龍樹の前でそれを広げた。

「何だこれ？・・・・って、これ？の認証状じゃねえか！」

人目をして龍樹は小さい声で突っ込んだ。
それに反応した翔良も教室に入ってきた。

翔良はその紙を見て呟いた。

「ああ、補充要員か」

「その通りだよ。今井君」

怪人〇十面相を思わせる口ぶりで耕治はそう呟つ。

だが龍樹は補充要員が良く分かつてないらしい。

耕治は龍樹の気持ちを察し、鼻高々に説明を始めた。

「おや、分かつてないようだねリューちゃんは、補充要員はその名の通りN?の補欠と銘打っているがその実態は主に情報収集を担当し、いわば戦闘面のサポートを行うのだよ。わかつたかね、リューちゃん」

「分かつたがその喋り方は何だ?」

「昨日江〇川乱歩を何冊か。ハマっちゃって徹夜した」

「勉強しろよ」

「ついでに言えば補充要員は一般生徒でも親の承諾すらあれば入れるのだよ、龍樹君」

翔良も同じ口調で補足した。

2人の〇十面相は見つめ合ひ、ふふふふと笑い合つた。

――放課後・飯島高校生徒玄関――

「で、結局用件は何だつたんだ？」

龍樹が下駄箱の靴と上履きを履き替えながら翔良に尋ねる。

「えーと、好きな推理作家は誰かって話か？」

「それはお前と耕治の馬鹿話の内容だろ」

二人は靴に履き替え、校門を出て帰路に着く。

「ああ、分かつてゐる。何、まだ確証は無いんだが昨日の夜男が1

人殺されてな」

龍樹は適当に相槌を打ち、空を見上げた。

日が傾き始めている。

後ろからはサッカー部や陸上部の元気な掛け声が聞こえてくる。

「で、その死体が妙なんだ。首と右腕がすっぽり切られててな

翔良が左手で自分の首と右腕を切るような動作を見せる。

「ただの獵奇殺人じゃねえのか？」

「この世の中で妖怪と獵奇殺人鬼どっちが多いよ」

龍樹はふっと笑い、沈黙した。

しばらく歩いてから龍樹はまた尋ねた。

「正体は分かつていいのか？」

「さあ。だから新しい補充要員採用したんだろ」

翔良はいつの間に取りだした何かの設計図と睨めっこしながらそんなことどうでもいいといった口調で返す。

「今度は何作ってるんだ？」

「コーナーショット。大昔に滅んだらしいが是非復活させたい」

「そんな物需要あるのか？」

「多分無いかな」

ふと強い風がこちらに向かつて吹いて2人は動きを止めた。

一瞬、龍樹は顔をしかめて足を止めるもまた構わず歩き始めた。

「…………何も起きなきゃいいが」

龍樹は誰に向ひ叫びもなく不安げにそう呟いた。

その日の深夜、パチンコ『ラッキー7』飯島店で左足を切断された男性会社員の遺体が発見された。

かまいたち（2）～男が囮つて邪道～

「昨夜また犠牲者が出たわ。今度は左足が持つてかれたらしいわ～」

いつもと変わらない口調でいづみは簡潔な説明を終わらせた。

現在、N?は剛太と翔良を除く全員が寮内のいづみの部屋に集められている。

部屋の内装は壁に立てかけてある日本刀さえなければ、一般的な若い女の部屋である。

直哉が日本刀に目を向けながらも質問した。

「やつぱりかまいたちですかね？」

「その可能性が高いけどまだ実態が掴めてないから何ともね」

そう言つていづみは肩を竦める。

しかし、人が2人死んだのは自分たちのせいだという自覚が無いのかその感情を押し殺しているのか、いづみはいつも通りニコニコ笑つていてるだけである。

もつともそれはいづみだけでなく直哉以外の委員もこのような事態に馴れているのか各自好きな事をしながら適当に話を聞いている。

グロックの手入れをしながら龍樹が尋ねた。

「で、いつ動くんですか？」

「本当はすぐにでも動きたいんだけどさつを言つたように向こうの

正体が分からぬから危険だし、かといって次の犠牲者を出すわけにはいかないから。そこで

いづみが眼鏡の位置を直してから続けた。
「囮を使いましょ~」

何故かいづみの声は少し楽しげである。

その時、龍樹の背中に悪寒が走った。

笑みを浮かべながら震える声で龍樹は尋ねた。

「誰が？」

「勿論龍樹くん」

今のはいづみは小悪魔ビコロか悪魔の微笑みを浮かべている。
どうすればあんな人に恐怖を与える微笑みが作れるのか直哉は疑問
に思った。

「…………一応理由を聞かせてもらえますかね」

「まず今回の件の被害者は両方男性。だから私と佳奈ちゃんは除外。
で、直哉くんは勿論翔良くんもほとんど妖怪の実戦経験が無く危険
なのでこれも除外。零治くんは相手がかまいたちの時に武器が武器
だけに迅速な対応が出来ないから除外。となると、グロツクにパー
スメーカーにM870が標準装備の龍樹くんが一番適してると思う
んだけど?」

「かまいたちだつたら男女関係なく殺すと思いますがね」

直哉は龍樹の意見はもっともだと思つたが勿論肯定できるわけがない。

「と、言ひ訳だから」

いづみは佳奈が読書をする為にもたれかかっていた真新しい段ボール箱から背広を一着取り出した。

「これ着て～」

「何でちよつと甘えた口調なんですか・・・・・・・・・・」

「色気を出した方が良いと思つて」

「むしろ色仕掛けしてどうするんですか」

と、反論しつつもいづみの左手が日本刀に伸びているのを見て龍樹は素早くいづみから背広を奪い取り、制服の上を脱ぎ、背広に着替えた。

それを見ていづみが感嘆の声を上げる。

「きやあ、かわいい～」

「楽しんできますよね？」

「7：3つでところかしら？」

「遊びの比率が7で仕事の比率が3つで」とですか?「

「いや、髪型も7：3にすればいいのについて

「仕事行つてきます」

このままだと本当に髪型まで弄られかねない。

龍樹はそう判断して、素早く仕事の準備を終えた。

佳奈も読みかけの本にしおりを挿み、龍樹の後ろを着いて部屋から

出て行つた。

いづみが直哉に声をかけた。

「直哉くんも着いていつてあげて~」

「えつ？俺ですか？でも、いまいち何すればいいか・・・・・

「良いの良いの。見てるだけでも勉強になるから」

その言葉に押されて直哉も既に出て行つた龍樹と佳奈を追つ事にした。

だが、直哉は内心ほつとしていた。

部屋に集まつてから一言も喋らなかつた零治といづみといつ先輩2人と一緒にあそこに残されるのは正直気まずかつた。

一度、直哉は自室に戻り今井銃器店で購入したライフル、モーゼルKarr98kを背負つて先に行つた2人を追いかけた。

(それに佳奈先輩とも一緒に仕事が出来るし万々歳だ！！)

直哉はまだ彼女のことを諦めていなかつた。

先ほどまで黙つてお茶を飲んでいた零治が直哉が出て行くとよひやく口を開いた。

「いづみさん、2人つきりになったところで一緒に夕食でもいかがですか？夜景のきれいなビルの最上階のフレンチレストラン」
「あつ、卵切らしてたの忘れてた。今は・・・・・7時30分。
零治くん、ちょっと買い物行ってくるから留守番頼んでいい？」

いづみは零治の返事も聞かずに財布を持って出て行つた。

零治の精一杯の甘い誘いも虚しく彼はただ1人取り残された。

「ははは・・・・・」

乾いた笑い声だけが部屋中に響いた。

かまいたち（۳）～やの疾き」と風の如く～

龍樹は夜の飯島市の繁華街を歩いていた。

付近で2件も殺人事件が起きたせいかいいつもは賑わっているはずのここもひつそりとしている。

店も7時にはほとんどの店が営業を終了した。

龍樹はこの珍しい光景に目を移しながらもピンマイクへと話しかけた。

「全く妖怪が出る様子が無いんだが」

佳奈のやるせない声が返ってきた。

「そう言われても今日中に仕留めないとまた被害者が出るよ?いいから黙つて歩きなさい」

「はあ・・・・・」

龍樹の足取りは更に重くなつた。

龍樹から少し離れた路地にて

「佳奈先輩、もしかまいたちが出たらどうするんですか？」

「まだかまいたちとは決まってないけどね。いつもは龍樹がFack e S i x使って終わりだけど今回はそれが無いから佳奈が燃やして殺すと思う」

直哉は佳奈の口から出た言葉の意味を尋ねた。

「燃やす？」

佳奈が答えようとしたその瞬間。

彼女のすぐ後ろを明らかに違う雰囲気の風が通った。

佳奈は勿論、その風を浴びてすらいない直哉でも気付く程その風は異常だった。

「今のですよね？」

「うん」

佳奈と直哉はすぐに路地から飛び出して龍樹の元へと走り出した。

龍樹はその身を切りつけられるまで異常に気付かなかつた。

背中に走る燃えるような衝撃が彼を襲つた。

「ううー!?」

すぐにホルスターからグローツクを抜き、構える。

風は狭い道を存分に使い、前後左右上下を飛び回る。

牽制の意味も込めて龍樹は3発程撃つたが当然かわされた。

風がまた龍樹を襲う。

何とか直撃は避けたものの、今度は右肩に深い切り傷が出来た。

「狙つなら後の2人にしりよ、畜生」

風は大きく空に上昇し、急降下してきた。

それを見越して龍樹はカバンに入ってるM870を取り出し、風に向かつて発砲。

しかし、多方向へと弾を撒き散らす散弾ですら風に傷をつけたことは出来なかつたが龍樹の計算通りに事は進んでいた。

「UJの狭い道で散弾かわすとなるとやっぱ上か下だよな」

下降することでかわした風に2発の9ミリ・バラベラム弾が襲つた。

弾は風の中心部へと吸い込まれていった。

獣の悲鳴のような叫びを上げると風は逃げて行つた。

それからすぐに風が逃げて行つたのと逆方向から少しばかり遅い援軍が来た。

「どうしたの？」

「大丈夫ですか？」

佳奈と直哉は同時に尋ねた。

「やられた。あこつ予想以上に速いぞ。くそつ」

龍樹は傷口に学生力バンから出した消毒液をまず右肩にかけ、強引に背中にも垂らす。

痛みに声を上げそうになつたが我慢した。

包帯を巻きながら2人に指示を出した。

「あとから必ず追いつくから先に行つてくれ」

「分かつたけど妖怪は何処に行つたの？」

「血の跡を辿れ。最低でも2発撃ち込んだから出血してゐるはずだ。細胞組織が回復してその内追跡できなくなる。早くー。」

「分かりました」

「分かつた」

佳奈と直哉は道路に点々と続いている真っ赤な血を田印に走り始めた。

血が続いていた場所は森だった。

草木がうつやうと生い茂るその森はまるで来る者を拒むかのように木々を揺らして威嚇してゐるよつと見える。

直哉は正直少し逃げ腰である。

「この中みたいね。直哉くん、明かりある?」

直哉はポケットからペンライトを取り出した。佳奈は少し不満げな顔をしたが無いよりはマシだと思い、直哉の手からペンライトを受け取った。

「直哉くん、もしも危なくなつたらすぐ逃げて。ちょっと危険っぽいから」

「分かりました」

普段だつたら絶対女子を先頭に歩かせることなどしない直哉だつたが、今回ばかりはそれも躊躇われ、先頭を佳奈に譲つた。

だが、直哉はいくらなんでもそんな簡単に妖怪とは遭遇しないだろ

うと高をくくっていた。

その幻想は森に入つて3分もしない内にいとも簡単に崩された。

先に気付いたのは直哉だった。

一か所。本当に小さくその空間にだけ小さな竜巻が出来ていた。

竜巻は木の葉を纏いながらゆっくりとこちらに近づいてくる。

「佳奈先輩！――」

佳奈が一いつ瞬を向くよりも早く直哉は近くの茂みへと飛び込んだ。

佳奈もすぐに先の呼びかけの意味を理解し、右に前転することで竜巻をかわした。

竜巻の中にはいたちがいた。

両手が鎌の様な鋭い刃物になつてゐるところを除けばそれは正しくいたちだろう。

その姿はやはりかまいたちだ。

かまいたちの体当たりで直哉のペンライトは壊され、光源が森から消えた。

「つたく、もうー。」

佳奈の右腕を伝つて辺りの草木が燃えだした。
それによつて再び辺りは明るくなる。

「熱つ！！」

だが、直哉はその燃えている草木の生い茂る茂みへと隠れていたの
だからたまつたものではない。

佳奈の右腕から炎が出たのが気になつたが直哉は身の安全を第一に
考え、その場を離れた。

かまいたちは佳奈に狙いを定めたらしく直哉を追つてこない。

「いのー。」

佳奈の右腕から炎が噴射される。

今度の炎は明かりとりの為ではなく、かまいたちへの火炎放射である。

かまいたちは火炎放射をかわして佳奈に体当たりを仕掛ける。
竜巻の中でかまいたちが両手を前に突き出して構えていることから
触れたら指の1本や2本は持つてかれるだろう。

佳奈も危険を察知し、体当たりをかわしてすぐに火炎放射による反撃に移る。

そして、かまいたちはそれをかわす。

その応酬を何度も見て直哉の頭に一つの疑問が浮かんだ。

「何で佳奈先輩あんなトロい（・・・）やつを仕留められないんだ？」

かまいたち（4）～ザ・シューター～

江本直哉の動体視力ははつきり言って異常だった。

彼は物心ついた頃には父のクレー射撃を見ていた。

いや、魅せられていた。

彼の父は息子を射撃のオリンピック選手に育てあげたかったらしい。直哉はこいつやって成長していき小学校に入学する頃には1日8回は競技用のショットガン、M37を握っていた。

そして、中学校に入り当然彼はクレー射撃部に入部した。

そこで彼の驚異的な動体視力が目覚めた。

クレーの飛ぶ速度が異常に遅く見える。
それどころか他の物体の動きも。

普段はどうつてことないのだが集中時には30分の1倍速で世界が廻っているように見えた。

しかし、直哉のクレー射撃の腕前は悪くは無かつたが探せばもっと

凄い記録の持ち主はいるだらうといつぱりこのスコアだった。

その理由として挙げられるのが精神力。

1秒が30秒。10秒が300秒。60秒が1800秒。

その時間の流れの遅さを嫌つて直哉は出来る限り集中せずに競技に臨んだ。

やがてクレー射撃も高校では一度としないと誓っていた。

直哉は少しずつ不安になつてきた。

スピードの違いで佳奈が少しづつ押され始めているからである。事実、かまいたちはまだ火傷1つ負っていないのに對して佳奈の制服は所々破れ、そこから血が流れている。

「くつ、龍樹はまだ？」

佳奈は1人自問してかまいたちに向かつて火炎放射を行う。
だが、やはりヒラリと身をかわされてしまう。
そして、かまいたちの体当たり。
その応酬は何度続いだらうか。
少なくとももう直哉は20回は見た。

そして、また佳奈の右腕から火炎放射・・・・
が、どれだけ待っても佳奈の右腕から炎は出なかつた。
その隙を逃さずかまいたちは佳奈の右腕を狙つて前足を振り下ろしにかかる。

「佳奈先輩！！」

その時の直哉はかまいたちのみに集中していた。

愛する人と自らの精神。

全ての人がそう答えるかは分からないが少なくとも直哉は後者を犠牲にした。

直哉は足下のモーゼルを取り、高倍率スコープを覗き込んだ。目標までの距離は50mも無い。

本来なら高倍率スコープを覗かずとも当てられる。

かまいたちの振り下ろしあはひどくゆっくりしたものに見えた。だが、佳奈の右腕はもう間に合わないだる。

独特的の発砲音と夜の森を照らす程のマズルフラッシュ。そして、かまいたちの悲痛な金切り声。

苦しむかまいたちの傍に佳奈の右腕が落ちているのを見て直哉は自責の念に駆られた。

モーゼルのボルトを引き、空薬莢を排出する。

腹に穴のあいたかまいたちに続けて今度は頭に風穴を開ける。が、声を上げて苦しんでいるものの、死んではない。

今度こそ殺してやる。

そう思い、またボルトを引こうとした時だった。

「佳奈、逃げろ！――」

龍樹の声が森中に響いた。

佳奈は切断された右腕をそのままにして急いでその場から距離を取つた。

龍樹は翔良手製の手榴弾をかまいたちに向かって投げた。

途端にかまいたちの周囲は爆音に包まれた。

燃えながら光と炎を放ち続ける森をバックに3人は帰路についた。

「一体、何だつたんですか？」

直哉は龍樹に訳が分からぬといつた風に尋ねた。

「何の事だ?」

「佳奈先輩の右腕ですよ。出血すらない

「ああ・・・・・・」

だが、龍樹の口から答へは出なかつた。

龍樹の言つべきか言わざるべきか悩んでいる顔を見ると直哉は追求できなかつた。

「こしても良く寝てますね

直哉は佳奈を背負い直し、呟いた。

あの爆発の後、佳奈は氣絶したのがぐっすりと眠つていた。

爆発から身は守れたらしく火傷の跡が無かつたのが幸いだつた。

ちなみにかまいたちの方は文字通り跡形も無く消えていた。

直哉は佳奈の無い右腕の切断面をまじまじと見つめる。

そこからは一滴の血も噴き出していない。実に不思議な光景だった。

「寝込みを狙つてるのか？最低だな、後輩」

「いや、ちょっと、違いますよー」

そう弁解した直哉だがその気持ちが無かつたと言えば嘘になる。

かまいたち（5）～ピアノは弾けない～

佳奈は夢を見ていた。

「佳奈はピアノが上手ね」

「将来はピアニストかもな。ハハハ」

（嫌だ・・・・・嫌だ）

「大丈夫ですか！？・・・・・生存1！子供が1人！！」

「残念ですがもう右腕は・・・・・」

「兄さんの娘？しかも右腕が無い？そんな子家で養えませんよ
市で起きた津田夫婦惨殺事件は娘の津田佳奈ちゃん（9）の
証言によると妖怪の仕業であるとされており・・・・・」

（嫌だ嫌だ嫌だ）

「初めてまして。私は委員長の根来いずみ。これからよろしくね」
「今井翔良だ。突然だがもう一度ピアノを弾きたくないか？」
「お前にピアノの道はもうない。翔良に上手く騙されたんだよ」

（嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ）

「お前の右腕は妖怪を殺すためだけ（・・）のものだ

「いやああああああああーー！」

叫びながら佳奈は上体を起こしてした。

夢から覚めた今でも体に恐怖の色は刻まれており、現に心臓の鼓動はまだ早い。

「おっ、起きた起きた

その声で佳奈は「」が翔良の住む地下帝国のアバードの上であるとこ

うことを悟った。

ちなみに翔良は寮にも自室があるのだが、こちらの方が快適だからといつ理由でいつも自分の地下帝国で寝泊まりしている。

地下帝国。

その名の通り翔良は学校には無断で地下に自分だけの空間を作り上げた。

ここに広がっている通路を通ることで学校からエスケープすることも可能だ。

翔良の地下帝国への入り口は校内だけで44か所、校外にも7か所作られている。

しかし、これは翔良が把握しているだけの数であり、いずみや龍樹からは校外どころか県外にあるのではないかと疑われている。

「ほりココア飲め」

翔良は佳奈にココアを差し出しだが、カップは佳奈の左手に阻まれて壁に激突して割れた。

「コアがカーペットに染みて行く。

「…………ったく、俺も嫌われたもんだ」

「佳奈はまだあなたのことを許してない」

「まあそりやそうだらう。つまるところお前も含め飯島高校の裏モルモット・風紀は皆俺の実験動物だからな。…………じゃあ聞くが替えの腕は要らないのか？」

佳奈は黙つて首を横に振った。

「さうだろ？じゃあこの『火車ー？プロトタイプ』の使い心地を試してくれ

翔良は台車に掛けられていた布を取つた。

台車にはどこからどう見ても人間の腕にしか見えない物が乗せられていた。

「麻酔打つからじつとしてろよ。それと起きたらカップ片付けてくれ

「嫌だ」

翔良はその答えに不満一つ漏らさず黙つて佳奈の左腕に注射針を突き刺した。

佳奈は目の前で笑う少年に憎惡の炎を燃やしながらもゆっくりと眠りについていった。

少女はなくなりた腕を求めて必死に助けを請うた。
そして見つけた1つの方法。

義手

彼女は騙されているとも知らずにその案を承諾した。
彼女はこれまでまたピアノが弾ける。そう思った。
だが、その義手は妖怪を焼き殺す為だけの物だった。

それがN?津田佳奈の誕生だった。

義手の中に簡易火炎放射機を無理やり埋め込んだ単純だが恐ろしい兵器。
それが今井翔良の発明品の中でもトップクラスの出来を誇る火車である。

「つまり、ただのガソリン切れだつたつてことですか？」

佳奈は頷く。

佳奈の右腕の話を聞き終えた直哉の問いは実に単純なものだった。

佳奈は今日の学校は一応休み、部屋で寝ていた。

直哉は学校が終わるとすぐに佳奈に昨日の一件を聞きに来たのである。

「うん・・・・・・でも何とも思わないの？直哉くんは」「何がですか？」

「右腕が・・・・・・義手つて」と

「そんなの気にする訳無いじゃ無いですか。それより今夜どうですか？妖怪倒したから国からボーナスも出ましたし」

直哉はそう言って厚みのある茶封筒を佳奈に見せた。
その表情に嘘偽りは無い。

佳奈は自分の事を否定しない後輩に対して好意を抱いた。
恋愛感情とはまた別物だが。

と、同時に自分の新しい右腕に目をやった。

「これからもよろしくね。火車」

直哉に聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で佳奈は呟つづけた。

吸血鬼（1）～ベタな転校生～（前書き）

今章はかなり長くなると思われます

吸血鬼（1）～ベタな転校生～

「ふあーあ・・・・・・」

鎌田龍樹は思わず周りが目を向けるほどの大きな欠伸をした。

昨夜は遅くまで起きていた所為か、眠気がひどい。

理由は深夜に放送する映画を見ていたからといつ単純なものである。

「鎌田くん、先生のありがたいお話の途中に欠伸をすることは失礼にも程があるよ」

そう抗議するのまえのじょぎつたくは龍樹の田の前の席に座っているクラス委員である前野良沢。

眼鏡を掛け、綺麗に揃えられた7・3分け姿はやはり生真面目な印象を受ける。

それに加えて誇らしげに胸につけてあるクラス委員のバッジが憎い。

「あー、はいはい。俺が悪ひございました。申し訳ございません」

龍樹の適当な態度に腹を立てたのか良沢は更に強い口調で返す。

「君が僕に謝られても困る。先生に謝りたまえ」

「・・・・・俺にとつてはどうでもいいが、今お前の味方一人もいなide」

良沢が後ろを振り返ると、クラスの男子が全員良沢を冷たく見つめ

ている。

女子は女子で鬱陶しそうな表情である。

普段ならクラスでも浮いている龍樹の味方をするのはとても珍しい事であり、原因は良沢が龍樹に抗議する直前の担任の一言の所為である。

「転校生を紹介します」

その言葉で2-C生徒は男女問わず期待で胸が高鳴った。

その大事なタイミングで誰が好き好んでクラス委員の説教など聞きたがるだろうか？

勿論そんな物好きは一人もいなかつた。

「な・・・・・いや、まあ今はいいでしょ！」

良沢は周囲の視線に耐えきれずに席に着いた。
そこで担任の教師は気を取り直して廊下に立っているであらう転校生に声をかけた。

ガラリと戸が開く音がする。

教室内に入ってきたのは男子の期待に添えた女子であった。

背は高く、黒髪で髪型はポニーテール。
人懐っこそうな顔つきをしている。

少女は元気な声で自己紹介を始めた。

「鬼頭流華きとうりゅわといいます。みんなよろしく！」

一瞬で男子全員の気を引き、女子全員にマークされるのはまさに神業であった。

「じゃあ鬼頭さんは鎌田くん…………あの一番後ろの子の隣に座つてください」

いつもは生徒を黙らすために拳銃の引き金を引く程の恐ろしい男性教師でもやはり転校生には優しい。

男子からの妬みの視線が龍樹に殺到する。
が、龍樹はそんな視線などどこ吹く風で受け流している。

美しい動きで流華は龍樹の隣の席まで歩き、座り、そして彼に話しかける。

「よろしくね、鎌田くん」

対する龍樹は不愛想に返事を返した。

「ああ、ヨロシク」

流華の人気は朝のホームルームから、現在昼食の時間までの短時間で絶対普遍のものとなっていた。

流華のルックス、声、性格全てにおいて高得点であるのだから当然だろう。

最初は煙たがっていた女子ですら何人かは彼女の周りに集まっている。

そこから少し離れた場所で龍樹と耕治は購買で売っていた幕の内弁当をひつそりと食べていた。

「で、今度は何があつたんだよ？」

龍樹が白米を箸で口に運びながら尋ねる。

「おーおい、まだ何かあつたと決まったわけじゃないだろ？」「

「お前が昼食と一緒に食べようって言う時は大抵厄介事を持つてくる時だろうが」

「うーん。確かに

そこで耕治は一度、紅じやけを咀嚼してから続けた。

「千尾川^{ちおがわ}の河原でミイラ状態の女性の死体が発見された。体中に無数の刺し傷があつたらしい」

千尾川とは飯島高校から北に3・4km行つたところを流れる川の事である。

「…………お前、どうからそんな情報仕入れてきてんだ?」

「企業秘密。言つとくが、かまいたちの時も情報源は俺だぞ」

「まあ、あのゆつたりとした委員長がそんな事するイメージは無いしな」

今頃、いづみは盛大なくしゃみをしているだろうと考へると、龍樹には少し笑えてきた。

「しかし…………」

龍樹は楽しそうに談笑している流華を見遣つた。

龍樹の視線には気付かず、彼女は構わず雑談を続けている。

「すごい人気だな」

「現在校内女子人気投票の結果第8位。俺はああいうタイプは嫌いなんだけどな。でも、これからも順位を上げ続けるだろうな」

またもや耕治の情報の仕入れルートが気になつた龍樹だが、聞くだけ無駄だと判断し、追求を断念した。

少し間をおこしてから、龍樹は思に出したよひに言つた。

「つてか、千尾川つてことは飯島北も来るんじゃないのか？」

「そりやそりでしょ。標的の正体が分かつて無いから強いのを送つてくるのは間違い無いだろうな」

飯島市には全部で4つのN?を設置している高校がある。

飯島市の中に位置する飯島高校。

そこから5km北に行つたところにある飯島北高校。

飯島高校から東に17km程行つた所にある飯島東高校。

飯島北と飯島東を直線で結んだ時のちょひど中心に位置する私立海円高校。

その他にも小学校、中学校、市役所などにもN?が置かれており、妖怪を殺すことで貰える賞金で生計を立てている賞金稼ぎと呼ばれるN?も珍しくはない。

ちなみにN?といふのは、妖怪と戦う者全てをひっくりくるめた呼称であり、学生のみに適用されるわけでは無い。

「まあ、人が死んでるから小学校、中学校は動かないだろ？し市役所の人員割くわけにもいかないから、やっぱり動くのは北の連城か井森だろ？」

「井森はやめてくれ」

龍樹は飯島北高校に知り合いの顔を思い浮かべ、苦々しくそう呟いた。

「賞金稼ぎは『サソリ』が近くにいるけど今出張中。やっぱり北が本命だな」

「…………いつも思つんだがそのコードネームみたいなのは何なんだ？」

「本名出して妖怪殺す奴の方が少ないって。下手すりや公認されて

いる俺らみたいな賞金稼ぎから邪魔物扱いされて報復攻撃受けるからね」「

話し終えると耕治は割り箸を弁当の中に入れて、蓋を閉め、その上から輪ゴムをかけ、ゴミ箱にショートした。

まだ半分以上残っていた弁当の中身を見ていた龍樹は小さく「もつたいない」と呟いた。

吸血鬼（2）～生じる疑惑～

放課後、飯島高校の生徒の大半が退室する中、龍樹は一人で机に向かって一心不乱にノートを写していた。

今日の授業はほとんど夢の中で受けていたので、耕治から借りた全5教科のノートを書くのはかなりの重労働である。

「ふふふ、鎌田くんたいへんやつだね。手伝おつか？」

声の主は本日のM.V.R.Iと鬼頭流華であった。
が、龍樹にはわざわざ流華の顔を確認する暇すら無い。

「いや、自分でやるわ」
「釣れないなー。こんな可愛い娘が手伝つてあざようつて言つて
のに」
「自分でそれを言つたか」

流華は龍樹のノートを覗き込み、感嘆の声を上げた。

「す」「ひ、こんな綺麗に字つて書けるの？」
「ありがとよ。だけど、そんな褒める程の出来栄えでもないだろ？」
「私と比べたら十分上手いって」

流華はどこから取り出したのか自分のノートを開いた状態で見せる。

「これには龍樹も苦笑した。

中学生でももう少し上手く書けるだらう。

「ねえ、字教えてよ。字」

「…………は？」

「いや、そのままの意味」

「何で俺なんだよ」

「何だつていいじゃん。教えてよ」

龍樹はそんな面倒なことをしてゐる暇は無いと断つもつりだった。

だが、一つの考えが浮かび、その言葉を飲み込んだ。

龍樹の目が鼠を見つけた猫のように輝いた。

龍樹は机に置いてあるノート4冊の山を軽く呪ぐ。

「これ全部写せ」

「ええっ！？」

「字がうまく書けるようになるにはとにかく字を書く。これ以上と
ない理に敵つたやり方だろ？」

「そんなーーもつと修行みたいな感じのやつにしてよー。」

「お前にまだ早い！！！」

「ひひ・・・・・・・・鎌田くんの意地悪」

と、泣き声を漏らしつつも流華はノートの上に手を伸ばした。

が、龍樹の脳内に流華の字が上手くなつてほしいうつ願いなどこれっぽちもない。

流華の手伝いもあり、ノート[写]しがもう少しで終わりそうな雰囲気を醸し出してきた時であった。

突如、絹を裂くような悲鳴が校内に響いた。

「何だ！？」

龍樹は反射的に立ち上がる。

流華も驚愕の表情を浮かべている。

そして、流華は何の前触れもなく龍樹に一気にまくし立てた。

「鎌田くん、すぐ救急車呼んでー急がないと間に合わないからーー！」

言い終えると、流華は疾風のごく走り去っていった。

龍樹もすぐに後を追つて廊下に出たが、流華の姿は無かつた。

龍樹は舌打ちをして、119番をしようと携帯を出したが、先ほど
の流華の言葉の不自然さに気付いた。

1つは何故救急車を呼ばなければならぬと彼女は思ったのか。

もう一つは急がないと間に合わないことばかりのことなのか。

「おい、龍樹ーー！」

翔良の呼びかけで龍樹は我に返った。

「どうした、翔良」

「妖怪が校内にまで出やがった。下で体中に穴開けて血流してゐる女子が倒れてる。まだ犯人は近くにいるはずだ。探すぞ！！」

「ああ。その前に119番は？」

「もうした。行くぞ」

翔良の後に続いて龍樹は走り始めた。

同時刻、飯島北高校会議室にて2人の男子生徒の会議が行われてい

た。

片方は喧嘩つ早そつな雰囲氣を放ち、口調も荒々しい髪を金に染めた少年。

もう片方は金髪の少年とは対称的に冷静な態度で切れ長の目つきを光らせる黒髪の少年。

「つまり今回の敵は吸血鬼つことだろ？連城ちゃんよ！」

「そのちゃん（・・・）は止める井森。^{いもり}と、言つてもまだ調査段階だが十中八九当たりだ」

「しかしよ、こんな俺らと同じくひいの年齢に見えるガキが妖怪だとはな、恐ろしい世の中だ」

「容姿が端麗すぎるのはむしろ妖怪だろ。その写真通りだ」

「人間だったら是非とも俺のものにしたかつたんだがな」

「下手な情はかけるな」

「そんなことする訳無いだろ、この俺が！」

「分かつたなら良い」

「で、いつ動くんだよ」

「そうだな・・・・・・・・・5日後くらいには存分に暴れてもらおうか」

「5日か・・・・・・・まあいいだ。今日の俺はハイだからよーーー！」

下卑た笑い声を発しながら井森はアサルトライフル、H&KG36を乱射し始めた。

発砲音と共に壁に留められていた鬼頭流華の[写真はあつといつ間に
蜂の巣から紙屑へと変貌を遂げた。

吸血鬼（3）～友だち～

翌日、龍樹は体育館で校長による昨日の事件のあらましをほおつと聞いていた。

七人ミサキの時は学校内での事件ではなかつたからそんなには騒がれなかつたが、今回はその校内で事件が起きてしまつたので、全校集会が開かれた。

昨日の被害者の女子生徒は発見が早かつたことも幸いし、一命を取り留めたらしいが、学校でも今後の方針を決めるからだからなのか今日は現在行われている全校集会と学活だけで終了である。

「と、いうわけでこの度はこのような不幸な事件が起きてしまい、今日から3日間は臨時休校といたします」

校長がそう締めくくり、生徒達は歓喜し、教師達は落胆した。

龍樹が帰りの準備をしていた時であつた。

「鎌田くーん」

期待を含んだ声で龍樹は自分の名前を呼ばれた。

龍樹は振り返り、少し驚きながらも返した。

「どうした鬼頭？」

「流華でいいよ」

「分かった。で、どうした？」

流華は少し怒ったような声で返した。

「ひどいよー昨日字教えてくれるって言つたじやん」

ちなみに龍樹は今日も教えるといった覚えはない。
だが、このまま帰るのも悪く思つたので素直に教えてやることにした。

「分かった分かった。良いから場所移すぞ」

龍樹はクラスメイトの視線を感じながらも歩き始めた。

――飯島市立図書館――

2人は飯島市の西に位置する図書館に来ていた。

この図書館は利用者がほとんど居らず、全部で12個設置されている内のテーブルは10個も空席である。

かといって本を選んでいる人影もあまり見受けられない。

蔵書数も少なくなく、内装も綺麗、近くに大きな図書館があるといつわけでもないのに人気が無い。

それが飯島市立図書館である。

「だからとめはさひとつと止める。はらいも雑にするな

「うう・・・・・難しい」

流華は龍樹のスバルタ教育によつてじいがれていたといひだつた。

「鎌田くーん、お腹空いた

「紙食え」

「山羊じゃないんだからさ・・・」

「字を書いた紙を噛まずに飲み込むと字が上手くなるんだぞ」

「・・・本当?」

流華は僅かな人目をばかりながらもクシャクシャに丸めたノートの切れ端を飲み込んだ。

ちゅうと流華に字を教えるのが楽しくなつてきた。

「じゃあ、ここからここまで全部覚えとけよ。学校始まつたらテストするから」

が、答えは返つてこない。

夕田で染まつた図書館内は流華の周りだけまるでモノクロ映画のような暗さを備えていた。

龍樹の帰り際に流華は一言「燃え尽きたぜ・・・」と、呟いた。

図書館を出るとすぐに携帯が鳴った。

「もしもし」

「やはり男の声といつものほ・・・」

電話の相手は珍しく零治であった。

「お前から電話かけてくるなんて珍しいな」

「ああ、吐きそうだ。早く切りたいから用件だけ言つぞ」

「どうぞ」

「委員長命令で明日は一日中犯人捜し。おそらく明後日もだ。以上」

「今日は何もないのか？」

「今日のことは僕は一言も言つてない。分からぬのか？無知なのか？だから男は」

「ああ、はいはい分かりました。バイバイ女好きの零治くん」

零治の続く言葉を言わせないうちに龍樹は電話を切った。
切るとほぼ同時にタイミング良くメールが来た。

どうせ委員長だらうと思つて確認してみると全く違つた人物であった。

—— 鎌田くん……女の子を置いて一人で帰るってひどくない？

語尾には怒った顔の絵文字。

そして、一行空いて—— 明日も字教えてよ—— といつ一文。

言つまでもなく流華からである。

龍樹は

—— 分かった。明日は夜になるけどいいか？ 来れるなら9時ぐら
いにどこかで待ち合わせしよう——
と、返した。

少し遅れて龍樹が寮に着いたら

—— 私は良い友達を持って幸せだよ—— ジャあ図書館の近くのファ
ミレスでね——
と、いつた文面が返ってきていた。

「…………俺の新しい友達は一年ぶりくらいか？」

龍樹はつこつと友達とこう単語に口を緩めてしまった。

吸血鬼（4）～確立する疑念～

「で、結局犯人は見つからなかつたのね」

いづみがやはりいつもと同じ口調で確かめるよつこ尋ねた。

しかし、怒つてはいないようだ。

龍樹はそれが分かつていてもやはり申し訳ない気分になつた。

「まあ、そうなりますね。3日も探したつてのにすいません」

校内での騒動が起きてから3日間、裏・風紀委員は血眼になつて犯人の行方を追つたが依然その足取りは掴めていない。

4日の今日も捜索は難航するだらう。

龍樹といすみは思わず身を乗り出した。

「犯人が分かつちました」

龍樹の注意を素直に承諾した耕治はいすみに軽く会釈して続ける。

「やべーよ、リューちゃん。ビッグニュースだ！」
「まずは委員長に挨拶しろよ」

第三会議室の扉を乱暴に開けて、座る前から興奮した様子で話し始めた。

沈黙を打ち破ったのは耕治だった。

椅子が倒れたが、2人とも氣にも留めない。

いづみが耕治に尋ねる。

「耕治くん。それは、誰なの？」

「俺の同じクラスの鬼頭流華ですよ」

龍樹は驚きから田を見開き、耕治を見つめた。

耕治は辛そうに龍樹から田を背け、カバンから何枚かの紙を取り出した。

紙はどこかのサイトからコピーしたのか、何と警察の資料だった。

龍樹もいづみもそんなことは慣れっこだったので、黙つて資料に目を通す。

「まず、奴の家族構成。2031年に実在した吸血鬼、鬼頭昭一が
ご先祖様です。奴はD町28人殺しの犯人です。警察は鬼頭昭一本
人とその妻、そして娘2人は仕留めましたが、当時2歳だった孫だ

けは行方不明です

そこで龍樹が怒氣をはらんだ口調で異議を申し立てた。

「待てよ、それで今17歳の学生つてありえねえだろ」

「リューちゃん。相手は吸血鬼と人間のハイブリッドだぜ？1歳にも満たない赤子から死にかけの老人まで姿は変幻自在だ」

「顔が割れてるなら話が早いわ。一気に

いすみの続く言葉は龍樹がテーブルを殴った音でかき消された。

「あいつが……そんな」

龍樹は彼女に特別な感情さえ抱かなかつたが、普通の友人としてはこの短期間でかけがえのないものとなつていた。

いつものように字を教え、いつものように毎食と一緒に食べ、いつものように別れの挨拶をする。

そんなありふれた友人だったが、彼にとつてただでさえ少ない友人を手にかけなければならないというのは少々重荷だった。

「リューちゃん。俺だつてあいつを嫌いだけど流石にあいつを殺したいとは思わない。でも、これが現実なんだよ」

耕治が冷たくそう言い放った。

龍樹はいすみと耕治の制止も振り切り、一人走り出した。

向かう先は流華の待つ2-Cだ。

「あー、鎌田くん。どうしたの？ そんなに息上げて？」

いつものように放課後残つて字の練習をしていた流華は龍樹に屈託のない笑顔を見せた。

龍樹は深呼吸をして心を落ち着かせてから、ゆっくりと聖書の序文を読み上げ始めた。

彼は聖書の内容をほとんど全て暗記している。

流華はそれを聞き、狂ったようにたたき回り始めた。
悲鳴まで上げている。

龍樹が聖書の朗詠をやめると同時に流華もペタリと動きを止めた。

「か、鎌田くん……。
「鬼頭……お前」

流華は何の前触れもなく、龍樹に掴みかかってきた。

力が尋常じゃないほど強い。

龍樹は床に押し倒され、首を絞められた。

「この細い体にどうにそんな力があるのだらうか？」

まるで万力で挟まれているかのように龍樹は感じられた。

「さ・・・・・鬼頭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

だろ？」

龍樹の問いには答へず、流華は首から両手を放そうとしない。

それが答えでもあるのだろう。

だが、流華はまるで自分でもこんなことしたくないといった悲しそうな顔をしている。

これすらも計算づくなのか？

龍樹にはようは思えなかつた。

龍樹の意識がまどろみかけたその時、流華の頭を何かが通過していつた。

流華は囁くよくな感情的な声を上げた。

と、同時に流華の両手から龍樹はようやく解放された。

龍樹はすぐに事態を察し、振り返った。

向かいの校舎の開いた窓からモーゼルK 98kの銃身が覗いていた。

すぐに2発目の>リ・モーゼル弾が流華の右胸に着弾した。

流華は鮮血を上げながら床に倒れる。

だが、倒れていた時間はほんの一瞬。

流華はすぐに起き上がり、次弾に備えたがその行動はどうやら無駄だったようだ。

龍樹が自分の目の前で手を広げて立っている。

そう。まるで自分を守る盾のよう。

流華は小さく舌打ちをすると、教室の窓ガラスを割り、飛び降りた。

龍樹は流華を追つてすぐ下を見下ろしたが、既に流華の姿は無かつた。

龍樹は曖昧に頷いただけだったが、その眼には確かな決意が宿っていた。

と、付け加えた。

「勿論俺と剛太先輩は例外だがな」

しばしの沈黙の後、翔良は

「明日の朝早くに鬼頭……いや、吸血鬼を仕留めることになつた。相手が相手だけに全員出動らしい」

だが、その役は翔良が買って出てくれた。

呆然としている龍樹に直哉は声をかけるか迷つた。

吸血鬼（5）～傑作小銃G36 vs 駄作小銃G11～

朝日によらしだされた山の入り口は妖しげな輝きを放つている。

ついこの間、七人ミサキが出没したあの裏山である。

耕治の謎の情報網によると最も流華が隠れた可能性が高いのはここだつたのである。

N?の面々、いづみ、佳奈、直哉、零治、そして龍樹。

佳奈が無言で先陣を切って歩き始めた。

続いて零治、その後ろにいづみ、龍樹、直哉の順で山内へと踏み入つていった。

前を見たままでいづみが龍樹に尋ねる。

「龍樹くん？覚悟は出来たかしら？」

「正直・・・・まだあまりです」

「あれは妖怪なのよ？七人ミサキの時は違つて生まれた時から」

龍樹の脳裏に高田の顔が浮かぶ。

「仮に妖怪だとしても友だち（・・・）でしたから」

「そう。でも、その甘さがあなたの寿命を縮めることになるのよ」

「俺たちはもう死んでるようなものでしょ？精神的にも肉体的にも社会的にも」

いづみはその問いには答えずに妖しく笑つただけだった。

それから5分も経たない内に先頭の佳奈が歩みを止めた。

「誰かいる」

すぐに全員が臨戦態勢を整えた。

目の前には金の髪を立て、黒いサングラスに黒のベスト、迷彩柄のパンツ姿の高校生くらいの少年が笑みを浮かべながら立っていた。

「1・2・3・・・・・5人か。案外少ないじゃねえか」

少年はそう呟いて不満そうに口を尖らせた。
だが、少年が龍樹の姿を見つけると嬉しそうに笑みを浮かべた。

「龍樹じゃねえか。元氣い？」

「相変わらず喜怒哀楽が激しい奴だ」

直哉が後ろから小声で尋ねた。

「この人誰ですか？」

「飯島北の血口中担当・・・・・井森宏明」

「血口中担当とはひでえな。俺は

そこでセリフを一度切り、背中にかけてあつた小銃、H&KG36を手に取り、龍樹たちに向かつて発砲してきた。

そして、撃ちながらセリフを続ける。

「特攻隊長だ！！」

龍樹たちは一齊にそれぞれの方向に散つて行った。

ただ一人を除いて。

直哉のみは状況が飲み込めずにただそこに立ち廻っていた。

「一回もらい——！！

井森が直哉にG36の銃口を向けた。

直哉は恐怖から両手を前に突き出した。

だが、彼に銃弾が着弾する前に射撃音が井森の左肩を抉った。

「つてえ！－」

井森は続く銃撃を避ける為、大木の背に寄り掛かった。

一度、銃声が止み零治の問いが井森に投げかけられる。

「その銃はG36だな？」

「・・・・・ああそうだ」

「・・・・・未だに謎だ。ドイツ軍は何故そんなごみを正式採用したのか。

確かにこいつはその銃に性能的には劣る。だが、見ろこのライン。究極の美じやないか」

零治はつゝとつとした表情で自分の愛銃G11を撫でた。

彼は自分のセンスが悪いなどと」れつぱりも思っていない。

もちろんそんなことは知らない井森は引き攣った表情で言葉を返した。

「だつせえーー！G11？そつちのが『みだらー』

瞬間、零治の心のスイッチが入れ替わり、悪魔を髪髪をせるような邪悪な笑みを浮かべた。

「出て」と、僕のセンスを否定するとはい一度胸だ。顔くらい見せる。死んだ後も2日は覚えていてやる」

井森は素直に木陰から出でてきた。

「随分と腕の細い兄ちゃんだな。ドンパチできんのかよ？」

森中に銃声が響き渡り始めた。

「始まつたつポイね

パジャマ姿の眼鏡をかけた白人の少女がハンバーガーを咀嚼しながら相棒に呼びかけた。

だが、相棒からの返事はない。

「行つてきなよケント。私はここでボーガイコーサクしてゐるから

ケントと呼ばれた少年は拳銃、H&K P7M8を片手に振りかえった。

少年の体は小さく線は細い。

その体型には不釣り合いな獣のような目つき。

いや、彼には何故かその目つきは似合っている。

ケントはヒヤッハーと奇声を上げながら走り去つていった。

少女はそれを見送ると次のハンバーガーに手を出した。

直哉は龍樹に無理やり引っ張られ、銃撃戦地から100mは離れた場所に連れてこられた。

100m程度ではまだ狙撃される可能性があったので、2人は岩場に隠れた。

開口一番龍樹は直哉に文句をつける。

「何、ぼおおっとしてんだ馬鹿。次は死ぬぞ？」
が、直哉も反論する。

「何ですか？

あの人は飯島北の人ですよね？一緒に仕事をすれば早く

「ああ、早く仕事は終わるぞ。だが、俺たちはいつでも金欠だ。
向こうだって報酬は多い方が良いと思つてんだ」

「だからっていきなり銃撃戦するって……殺す気ですか？」

「ああ、向こうは少なくとも殺す気だ」

直哉は面食らつて何も言い返せなかつた。

「いいか。前にも言ったように俺たちはもう死人同然なんだよ。化け物に殺されようと人間に殺されようと誰も悲しまない。また新しい駒を買わなきゃくらいにしか思われねえ。他のノ？に出会つた時点で、報酬の奪い合い……即ち殺し合いは確定なんだよ」

「でも」

「でもも何もねえ。大体、さつきあのままだったらお前死んでたぞ」

「…………はい。分かりました」

直哉の心情はまだ龍樹に納得はしていなかつたが、先ほどの事実もあつたため肯定するしかなかつた。

「いづみ先輩と佳奈先輩大丈夫ですかね・・・・・・」

「零治はいいのか？」

「何となくあの人は大丈夫な気がします」

「んなアバウトな・・・・・・」

龍樹はいづみ達と連絡しようと携帯を取り出した。

液晶画面を見て眉をひそめた。

「圈外か・・・・・・いや、それだけじゃないな。こりゃ」

直哉も龍樹の不審な態度を感じ取つて自分も携帯を開く。

携帯の画面には不自然な乱れが生じている。

「妨害電波ですかね？」

「そんなところだろうな。こんなに強い乱れとなるとかなり大掛かりな物を使つてゐるんだろうな」

ため息をつき、龍樹は携帯を閉じた。

直哉も伝染したのか消沈しきつた顔でため息をついた。

龍樹は直哉をたしなめるかのようにパンと手を叩き、歩き始めた。

「とりあえず、まずは吸血鬼を優先するぞ。あれさえ叩けば全て終わりだ」

出来れば吸血鬼に会わずにこのまま帰りたい。

そんな思いを振り切つて直哉も龍樹の後を追つた。

吸血鬼（6）～刀を語る～

いづみと佳奈は龍樹たちとは全く別方向を歩いていた。

その事に彼女たちは気付いてはいなかつたが、彼女たちは龍樹たちのことなど全く氣にしてはいなかつた。

問題はこの組み合わせにあつた。

「どうしましようかね」

「とりあえず進むしかないじゃん。携帯も使えないみたいだし」「佳奈ちゃん、年上には敬語を使わないと」

「佳奈はあなたと翔良だけはどうしても好きになれない」

「で、龍樹くんは〇〇なの？不思議ね～」

佳奈が右腕をいづみの後頭部に突きつけた。

いづみはその意味が分かつてないかと思つぽんご落ち着いている。

「焦がすよ？」

「あら、怖い。余程龍樹くんのこと慕つてゐるのね」

「龍樹は・・・・佳奈に生きる希望をくれたから」

「そう。まあ、どうでもいいわ」

いづみの行動は佳奈にとつても物陰に隠れていたケントにとつても予想外だった。

いづみは腰に差していた愛用の日本刀を抜くと、ケントの隠れている茂みにそれを投げた。

刀が腹に刺さつた状態でケントは背後へと飛ばされた。

「防刃チョック・・・・かしり?」

「気付いてたのかよ。完璧に気配消してたつもりだったんだけどよ

「そうね。女のカンつて奴かしら?」

ケントは防刃チョックに刺さつていた刀を抜くと、それを後ろに放り捨てた。

そして、レッグホルスターからハンドガンH&KP7M8を抜き、発砲。

9mmパラベラム弾が2発いづみの傍を通過した。

「どいて！！」

佳奈はいづみを突き飛ばし、ケントに照準を定めて火炎放射を行つ。ケントは佳奈の攻撃を予測して、火炎放射が行われる前に素早く右に跳んだ。

「危ねえな、もうちよいでレアじゃねえか」

「ハイアムになるまで焼いてあげる」

佳奈はさらに火炎放射を行う。

ケントはそれもかわして物陰に隠れた。
隠れながら反撃とばかりに佳奈に撃ち返してきた。

佳奈は上体を低くして銃弾をかわす。

「あなたも援護してよー。」

いづみは先ほどからずつと突っ立つたままで彼らの戦闘を見ていた。

極限状態での佳奈の叱責もいづみはのうべりうべりと返した。

「武器が無いもの。取りに行ってくれる?」

「そんなの自分で行つてきなよー。」

いづみは眼鏡の位置を直すとむりくつとした足取りでケントの方へと歩き出しだ。

ケントは格好の的であるいづみの方に狙いを定めて引き金を引いた。

しかし、銃弾は発射されない。

「な・・・・・・・・?」

「H & K P 7 M 8 の装弾数は8発。弾切れみたいね。
私が刀を取りに行くのとリロードが済むのどっちが早いかしらね~」

「うわーセーーーお前らは黙つて俺の的になれ!..」

ケントは空になつた弾倉を捨て、予備の弾倉を薬室に入れる。

だが、それよりも早くいづみの懷に隠し持つていた小刀がケントの左腕を貫いた。

「ああああああああ!..」

ケントは痛みから拳銃を取り落し、もがき苦しみだした。

いづみは拳銃を遠くに蹴り飛ばし、ケントの左腕に刺さつている小刀を抜き、今度は彼の右手を貫き、そのまま地面に刀を突きたてた。

ケントの右手は地面に磔にされた。

佳奈が怒りの表情を浮かべて文句を垂らす。

「武器無こつて言つてたじやん

「こなん小刀、武器の内に入らなこわよ。自決用のつもりだつたし」

いすみは更に深くケントの右手に刺さっている小刀を地面上にねじ込んだ。

ケントから上がる悲鳴は更に大きくなつた。

「さて、拷問の時間ね。佳奈ちゃん、向こうに落ちてゐるはずのアレ（・・）持ってきて～」

「だから自分で行きなよ」

「誰のお陰で無力化できたと思つてゐる？」「早く早く！」

いすみの言つとおりだつたのが腹立たしかつたが、渋々佳奈は刀が落ちているであらう茂みへと踏み込んでいった。

吸血鬼（フ）～殺してくれとあいつけ言つた

井森は地面に仰向けに寝転がっていた。

夜空を見る為と云うロマンチックな思考は勿論彼は持ち合わせてい
ない。

痛みと疲れで立つことさえも困難な状況だから寝転がっているので
ある。

その手にG36は握られていない。

そして、体の何か所かに刻まれている銃創。

急所に弾が当たつていなければ不幸なのか幸福なのか、彼にとつて
はとてもない不幸だった。

零治がG11を構えながらゆっくりと井森に歩み寄ってきた。

憎々しげに井森は呟いた。

「はあ・・・・・・・くせつ、こんな『ミミ』みたいな銃に負けるなんて」

「生憎だが、どんなに良い銃を持つていても使う人間の技量によってその銃は金にも『ミミ』にもなる。

別に君の使い方が悪いわけじゃない。僕の使い方が君以上に良いと
いうだけさ。

だが、これでG36対G11の決着はついたかな」

「・・・・・・・ひつー」

井森は寝転がつたまま両腕を大きく広げた。

「ん?」

「殺せ。尋間に掛けられるよつはマシだ」

井森はこの時になつてよつやく皿決用の武器の類を持つてこなかつたことを思い出した。

といつより彼は一度もそんな物持つてきたことがない。

ケントは恐りくあの拳銃を代用できるがあの性格だと自決なんてしないだろ？

だが、零治の答えは井森の予想とはかけ離れたものだつた。

「嫌だ。僕は気の強い奴、男でも女でも良いがそいつが無様な姿になるのを見るのがとっても好きなんだ。君にはもう少ししそこを虫のように這いつぶれていてもらおうか」「

言い終えると、零治は井森の両足を撃つた。

井森は短く悲鳴を上げて零治の顔を見上げた。

彼はさも愉快であるかのように嘲笑していた。

誰の事かは言つまでもない。

こんな表情であろうと世間一般では彼の顔はイケメンの部類に入る。

零治は井森に背を向けて歩を出した。

零治の背中に怒鳴を含めた言葉が浴びせられた。

「井森宏明、お前を殺す男の事だ。覚えておけ」

「やうか。じゃあまた会おうか、宏明くん」

龍樹と直哉の吸血鬼との遭遇はかなり突発的なものだつた。

先頭を歩いていた龍樹のつま先に何かが当たつた。

流華はぐっすりと眠つていた。

その表情だけ見るとやはり彼女が吸血鬼とは直哉にはじりじりとも思えなかつた。

そう言えば、彼女は何故太陽が出ている毎晩も活動できたのだろうか？

彼はふとそんな疑問を感じたが、これから彼女の息の根を止めるのにそんなことどうでもいいかと思い直して流華の頭にK a r 9 8 k の銃口を突きつけた。

小声で直哉は龍樹に尋ねた。

「ターゲットですよね？」

「ああ。その通り、だ」

龍樹は言葉を途中で言葉を切り、直哉の頭をグロツクで殴りつけた。

「ううと短く直哉は唸ると、彼はパッタリと倒れこんだ。

直哉は何が起きたかも分からず混乱した頭のまま意識を失つていった。

「悪いな直哉。 おー、起きる」

龍樹は流華の頭を軽く蹴った。

流華はそれだけで飛び起き、龍樹から距離を取った。

彼女は自分の頭を蹴った者の正体を知ると、目を見開いた。

「鎌田くん？」

「おはよう流華。いや形式上ここは吸血鬼か」

流華は吸血鬼という単語に一瞬反応し、龍樹に飛びかかろうとしたが彼の右手のグロック17を見て、動きを止めた。

彼の銃は真っ直ぐ流華の心臓に狙いを定めている。

「N o v a l u e。聞いたことあるだろ？？」

「意外。鎌田くんみたいなのがメンバーなんて」

流華は服が汚れるのも構わずその場に座り込んだ。

龍樹もそれに倣つて座り込む。

だが、銃口の向きはそのままだ。

背の高い草から垂れる朝露が龍樹の頬に落ちた。

お互に言葉を発せず周囲の虫の声がやけに大きく聞こえた。

流華が諦めたよつた口調で龍樹に話しかける。

「私を殺すんでしょ？」

「殺せるならお前を起こす前に殺してた。俺はお前に死んでほしくない」

「私が妖怪でも？」

「ああ」

「Ｚｏ？ａｌｎｅの上司が私のことを殺せつて言つても？」

「私が今ここの瞬間に龍樹を殺そつとしても？」
「いいからここから逃げてほし」

「私の質問に答えてないじやん」

「答えの出ない問題つてのはあるものだ」

「何それ、馬鹿みたい」

流華は声を上げて笑った。

龍樹は小馬鹿にされたようで腹が立つたが、子供のよつし無邪氣に笑い声を上げる流華を見てそんな気持ちは消えた。

ひとしきり笑い終えた流華は龍樹に尋ねた。

「どうして？私は化け物だよ？それを殺すのが仕事じゃないの？」

「他のメンバーだったらそうしてただろうつな。

田舎じやないが俺はあのメンバーの中で一番情に弱い

「嘘ついた」

「嘘なんかつかねえよ。

俺のことも何もかも忘れて別の地で幸せに暮らせ」

「鎌田くんが私を幸せにしてくれるって約束したじゃない。お前を幸せにしてやるって言つたじゃない」「せー

「お前の方が嘘つきだ」

流華は押し黙り、品定めするかのような視線を龍樹に向ける。

10秒、もしかしたらもっと短かったのかもしれない。

流華は静かに龍樹に尋ねた。

「私は今回の事件には関わってない。・・・・・って、言つたら信じてくれる?」

「信じてやる

「私、犯人に心当たりがある。あの女生徒の傷からして多分今回の吸血鬼の犯人は・・・・・」

それはまるで壊れた人形のようだった。
拷問を受けて必要な情報は全て引き出されたケントにはもう敵への
抵抗の色すら見えない。

佳奈はあまりに残酷ないずみの拷問の残骸を見たくなかつた為、あらぬ方向を向いたままいづみの報告を聞いていた。

「どうやら敵はあの子も含めて3人。内1人はほとんど衛生兵みたいなもので戦闘能力は皆無。

携帯が使えないのはこの子の使つてゐる妨害装置が原因みたいね」

「もう1人は井森のこと?」

「でしょうね~。まあ、零治くんの勝利は確実だから井森からの不意打ちは無いものと考えて良いわね」

いづみがそう言い終えた時だつた。

ケントのものと思われる叫び声がすぐ近くから聞こえた。

いづみと佳奈はすぐにケントの方を振り向いた。

ケントは口をパクパクさせながら体を痙攣させている。

その体がみるみるやせ細つていくのである。

彼の体はいまや骨と皮がほとんど触れあつており、ショックで対の目玉が飛び出し、地面に不快な音をまき散らす。

その様子はまるで生きながら体内をペラーナに食い荒らされているようだあつた。

彼の体には大量の針のような物が突き刺さつている。

それはチユーブのようになつていて、ケントの体から血液や臓器を吸い取つてゐるようであつた。

その証拠に針のような物の中を何かが流れている様子が外側から見てもありありと分かつた。

「どうやら吸血鬼つて言つてもヴァンパイアではないみたいね~」

いすみはゆっくりと抜刀し、刀を構えた。

吸血鬼（8）～飯島北高校戦線離脱～

物には何故か2つの名前があつたりする。

ほとんど変わらないはずなのに地方によつてその呼び方は様々である。

身近なところで言えば方言がそれにあたるだろつか。

その定義は妖怪にも当てはまる。

「始まつたみたいですね」

白人の少女が井森の傷に応急処置を施しながら呟いた。

彼女はこんな時でもハンバーガーだけは手放さず、時折それに齧り付きながら応急処置を続ける。

「今日は俺たちの負けか…………。
そういうよ、バレンシャ」

白人の少女、バレンシャは無言で手当てを続ける。

応答は返つて来そうにないので井森は勝手に言葉を続けた。

「今更なんだが、妨害電波の電源切つて良かつたのか？」

「飯島高校の味方をするつもりはナイんですけど、もし妖怪と飯島高校のメンツが遭遇したらワタシたちは安全にここを脱出できるじゃないですか。まあ、遭遇するとカクテイしたわけじゃないんですけど。それにある妨害装置をここに置きつ放しつてのもモッタイナイです」

「そういえば、本部の連城ちゃんに連絡忘れてたな。ついでにその妨害装置の回収も頼んでおくか」

「お願いします」

寝転がつたままで井森は連城に電話を掛ける。

数回のホールの後、連城は電話に出た。

「……………どうだった？」

「敗走敗走。ケントが死んだ」

「……………了解。」

「残念だ。迎えに行つた方が良いか？」

「大きめのトラックか何かと力強い奴何人か連れてきてくれ。
妨害装置の回収しなきゃいけねえからな」

「分かつた。

一応、警戒だけは怠るなよ」

「安心しろ。入口のすぐそこに居るからこざとなつたら近隣住民に
でも匿つてもうつせ。
じゃあ」

井森は電話を切り、再び自分の傷口に手を向ける。

バレンシアは傷口に包帯を巻き始めているのでもうすぐ終わるだろ
う。

「妖怪の正体・・・・・・知りたいデスカ?」

必要なこと以外をほとんど喋らないバレンシアにしては珍しいこと
だった。

井森は少し驚いたが、黙つて頷いた。

「今回の件の犯人はヴァンパイアじゃないですよ」

「…………何でそんな事黙つてたんだよ」

「黙つてたのは悪かつたとハンセイします」

そう言いつつもバレンシャの表情からは反省の色は見受けられなかつた。

井森は憤慨して掴みかかろうとしたが、傷が疼き一言唸つてもう一度横たわつた。

バレンシャは少し顔をしかめて井森に注意した。

「傷口は浅くはありません。動かないでクダサイ」

「お前、何考えてやがんだ?」

「だからハンセイしてるって言つてるじゃないですか。
ついつい言つタイミングを逃してしまっただけですよ」

「ほう。うちの高校にはお前とケントを抜きにしても11人N?が居るんだが?

しかも時間ならたっぷりあつただろう?」

追い詰めるような口調で井森はそのままくじ立ててから彼は気付いた。

彼女は表情一つ変えずに先程から自分の手当てをしてくる。

もし彼女に置いてかれたりしたら?

傷で動けない状態で妖怪に遭遇したら?

仮に妖怪に遭遇しなくても飯島高校のN?に見つかったら?

恐怖で井森は震えだした。

その様子を察知したのかバレンシャは比較的優しい口調で井森に声をかける。

「大丈夫です。

怒られたハライセに「こに置いていくだなんて」「ゾモつぽこ」とはしませんよ。

それにワタシの計画にアナタは必須だとワタシは思っています」

「け・・・・・計|画?」

「ええ。今は話せませんがタノシミにしてください」

この瞬間、バレンシャは初めて少し笑った。

その笑みはあるで感情が読み取れない不思議な笑みだった。

「お前は・・・・・何なんだ?」

「 もう？」

・・・・・あ、手筋で終わつましタ」

バレンシヤは立ち上がり、先に出口くと向かって歩き出した。

井森はゆっくりと立ち上がる。

ほとんど痛みが無い。

痛み止めが効いていると云えれば確かにそうなのだが、それにしても違和感がない。

応急処置どころか完治をさせてしまったのではなく錯覚するほどだった。

「 もうもう。

サツキ言いぞびれたけど今回の件の犯人はおじりおじり又はおじりと呼ばれるものです」

セイジ一度言葉を切り、バレンシヤはふと戻ったかのように続けた。

「今度はワスレズに言えました」

吸血鬼（9）～戦況をひっくり返す核弾頭～

4・73mm×33ケースレス弾が妖怪の皮膚に食い込む。

だが、決定的なダメージは与えられていない。

「硬い。装甲車並みか？あるいはそれ以上？」

零治は空弾倉を捨てて、次の弾倉を装填し、またケースレス弾を撃ち続ける。

妖怪は大きな赤い目をギロリと零治の方に向ける。

妖怪の身体は大きな首のみであり、長い無数の髪の毛の合間から大きな目と口が覗いている。

そして、その大きな口に見合つほどの大きな牙。

「おどろおどろしきだね」

「佳奈、それ以上言うな。信じたくない」

零治はいつも通り女性には微笑みを見せる。

だが、見せつつも佳奈に對して否定的な発言をする。

おどりおどりは髪を鞭のようすに撓らせ、零治に向かって突く。

零治は寸でのところでそれをかわす。

先程まで零治が居た場所には針金のような鋭さを持ったおどりおどりの髪が突き刺さっている。

髪を抜こうともがいでいるおどりおどりにすみは接近し、頭頂部を狙つて切落を行う。

残念ながら一刀両断とはならず、15cm程刃がいったところでも

いづみは刀を引き抜き、距離を取る。

折角付けた切り傷も妖怪の再生能力ですぐに回復してしまったが、いづみはおどろおどろの牙が自分に向かってくるのを見越しての行動であった。

「厄介ね」

「いづみさん、奴は硬い。しかし、言ひほど卑くもない。実際、いづみさんがほぼゼロ距離の位置から攻撃しても中々反撃しきませんでした。
佳奈の火炎放射で仕留めるのが得策かと」

こんな時でも零治は声色を変える。

いづみはその声色が気にくわなかつたが、実際に彼の言つとおりである。

しかし、佳奈が慌てて宣言する。

「でも、もつガソリンが切れそつー。」

「あと何回分かしり~？」

「一回撃てれば良い方!。」

「ケント君との戦闘で使い過ぎたわね~」

「外した時は考えたくもないですね」

そつ言につつも零治からは焦った様子は見られない。

それだけ佳奈の腕を信用しているのだろう。

零治は話している間もずっと弾幕を張っていたが、やはり効果は薄い。

おどりおどりが再び「ひかりに髪を伸ばして」とした瞬間、おどりおどりの背後から銃声が聞こえた。

小銃や機関銃のように連續した発砲音ではなく、1回1回途切れている拳銃による発砲音だった。

佳奈はすぐにその銃声の正体に気が付き、音の方へと走り出した。

そこにはグロック17を持つ佳奈の予想通りの人物がいた。

「龍樹……！」

「おお、佳奈。何だよこつ、硬す」

龍樹は言葉を途中で切り、上を向いた。

ちなみに正面にいたおどりおどりは消えていた。

おどりおどりが自分のいる方へと跳んできたからである。

踏みつぶそうとう魂胆なのだろう。

- ۱۰۷ -

龍樹は後ろに転がつて上手くおどりおどりの落下地点から逃げた。

龍樹のすぐ隣の前にはおどりおどりの姿が。

すぐに龍樹も態勢を立て直し、グロツクを一度しまってM870に持ち替える。

片手撃ちで1発。

だが、おどりおどりは衝撃に耐え、龍樹に向かって髪を伸ばしてきた。

相手との距離を考えて龍樹が髪を避けるのは困難だった。

「ナニカ」

龍樹は本能的に体を両腕で庇つた。

両腕に鋭い痛みが走る。

何本もの髪が龍樹の腕に突き刺さっている。

しかし、それだけではなかつた。

髪はうねうねと生物のように脈打つてゐる。

龍樹は自分の腕から血が出てないことに気付いた。

龍樹はおどりおどりの髪に吸血されてゐるのである。

それに気付いた瞬間、龍樹の目の前を炎の列車が通つた。

左には「ひりに右腕を向けている佳奈の姿があった。

「佳奈……」

龍樹は佳奈に叱声を浴びせた。

当の佳奈は涙目になつて龍樹の方を見ている。

「だつて、龍樹が、龍樹が」

「これで完全に勝ちはなくなつちやつたわね」

いずみが刀を鞘に戻し、逃げの姿勢を示す。

切り札のはずの佳奈の火炎放射が使えないなら勝つのは無理だろう
と思い、零治も銃撃をやめた。

もはやこつなつてしまつと向ひつを殺すよりもこちが逃げる」と
を優先するべきだつ。

「ここの誰もがそう思った。

しかし、龍樹とさつきから戦闘を黙つて見ていた流華は違つた。

「早くー。こっち来てーーー！」

流華は大声で佳奈たちを呼ぶ。

3人はおどりおどりの攻撃をかわしながら龍樹の元へと走る。

3人が龍樹と流華の元へ来ると、零治が文句を言った。

「何だ。とつと逃げないと大変な目に遭つじやないか

「そうだな。

とつあえず、大変な目に遭わないよつこまづは移動しようつか

龍樹はそつ言つとおどりおどりの方に向かって闪光手榴弾スタングレネードを投げた。

突然のことだつたが、佳奈たちはすぐに口を開け、おどろおどろの方に背を向け、耳を塞いだ。

そして、閃光と爆音に辺りが包まれる。

「で、一体どうゆつもつなのー？龍樹くん」

いずみがいつもの調子で龍樹に尋ねる。

だが、心なしか言葉に怒気が含まれているかのようにも感じられる。

閃光と爆音に包まれた場所から少し離れた位置に龍樹たちはいた。

爆発したらすくに彼らは走り出し、上手く逃げ出してきたのである。

後ろを見ずに走ってきたのでおどりおどりに効いたかどうかは分からぬが、爆音を超える大きな悲鳴のような声が聞こえたので多分しばらくは足止め出来るだろ？

「まあ、まずは作戦を聞いてください」

「作戦って、龍樹はまだ勝つつもりなの？」

「ああ。もしかしたら1人くらい死人が出るかもしれないような危険な作戦だけどな」

「そんな危険なことを僕らにさせようと言つのか？君は馬鹿か？大体、その作戦はリスクを除いて考えても確実なのか？」

「一気に質問するな零治。あいつさえ協力してくれれば確実だ」

龍樹の指差す先にはあまつさえ戦闘にも参加せず、龍樹の後ろを着いてただけの吸血鬼の姿があつた。

一同が視線を彼女に向ける。

「さあさあ、この戦況をひっくり返す核弾頭こと鬼頭流華に何を期待するつもり！？」

「ああ、皆信じられないだろうけど本当にこいつが戦況をひっくり返す核弾頭だ」

吸血鬼（一〇）～大きすぎる田に付かないもの～

おどりおどりにはもう自我は残っていない。

最初に目覚めた時はあの社についていた神の言いつけ通りに動いた。

神を粗末に扱つた者たちへの復讐。

当初の目的にそそつであつたが、血の味を覚えてしまつたおどりおどりはもはや血の食欲の為だけにその髪を血管に突き立てる。

そして、今日はまだその食欲は満たされてない。

「おー」

突然、呼ぶれておどりおどりは振り返つた。

その時には眉間にM870が突きつけられていた。

吹き飛ぶ体。

そして、飛んでいくおじりおじりに龍樹は容赦なくグロック一つによる追撃を続ける。

おじりおじりはよつやく自分が撃たれたところに気付き、龍樹に向かってその髪を放つ。

龍樹はその攻撃をかわしながらゆっくりと歩を進める。

時折、一応グロックによる銃撃も混ぜるが、あの硬い皮膚に銃弾が通っていないことは承知済みだった。

龍樹はあくまでグロックは牽制として使い、おじりおじりとの距離を上手く測つて左手のM870の引き金を引く。

盛大なマズルフラッシュと共におじりおじりは何度も後ろに大きく吹き飛ばされた。

おどりおどりの体には何度も風穴が開いたが、勿論すぐに再生する。

「あと300だ！」

龍樹は髪の毛をかわし、M870のスライドを引きながらまたおどりおどりくと突っ込む。

だが、ついに龍樹の右腕に髪が突き刺さった。

すぐに髪を抜くが、乱暴な抜き方だった為かどこか他の部位を傷つけたらしく龍樹の右腕から鮮血が流れ出した。

「悪い、零治二つからは頼んだ」

龍樹は出血する右腕を抑えながらその場に座り込む。

佳奈がすぐに包帯を持って龍樹に駆け寄る。

零治が龍樹たちのすぐ後ろから現れ、G11による援護射撃を行つ。

龍樹は佳奈の頭を下げ、自分も流れ弾から身を守るため頭を低くする。

すぐ頭上を33ケースレス弾が通過し、佳奈が小さく悲鳴を上げる。

零治は弾切れになつてもすべてロードをして、弾幕を張り続けた。

おどりおどりは連續した銃撃に少しずつ後ずさりを始めた。

龍樹と零治の銃撃だけでおどりおどりは随分と後ひた押された。

すぐ後ろは坂道になつておひ、もつおどりおどりは迷走場はない。

「今です、いすみさん！…その坂は一〇〇歩ありますから」

綺麗なよく通る声で零治がやつぱりこすみせ近づいていた。

すぐにおどりの体に刀を突き刺すと、そのままおどりの姿勢を坂道に落とした。

いずみ自身も刀を持ったまま坂道を下つる。

彼女の心に後退の文字はもうない。

「えー、まずは現状の戦力確認。

9mmパラベラム弾が32発、12ゲージ弾が11発、ケースレス弾が今セットされている分も含めて弾倉が7つ、日本刀1振り、で
流華」

「何かその中に組み込まれると腹立つんだけど

「お前は人じやないからな。で、後は……」

龍樹はどこかに電話をかけ始める。

いづみがいつもの調子で龍樹に尋ねる。

「どうに電話を～？」

「後輩ですよ。

・・・・・　おお、起きてたか。とまあえず、早く山の入り口を狙撃できるポイントを探せ。
・・・・・　吸血鬼？ 流華は関係ねえよ、とにかく化け物が入り口から出てぐるからそれを撃てよ。
5分以内にな、じゃあよろしく」

電話口から何か抗議するような声が聞こえていたが、龍樹は構わず通話を終わらせた。

「ああ、直哉くんね～。彼なら弾も豊富だし確かに戦力にはなるわね～」

「やつこつ」とです。

「で、結局流華ちゃんはどうこいつ役回りなの～？」

流華が顔をしかめる。

流華ちゃんといつ呼び方が気に入らなかつたのだろう。

流華はいづみに抗議の視線を投げかけるが、気付いていないのかわざと気付いていない振りをしているのかいづみはニコニコ笑つたままだ。

「あいつがファーリッシュですよ。吸血鬼の能力と言えば吸血に怪力、ここまで言えれば分りますよね？」

しかし、ここで零治が異議を唱えた。

「まさか、吸血鬼とはいふ女性に白兵戦をやらせる気か？
君は常識と言つものが欠如しているね。そんな奴は生きてる価値ないよ。早く死に」

いづみが零治の頭を刀の鞘で叩き、黙らせた。

「そもそも流華、お前喧嘩の経験は？」

「ゼロ」

「なら最初の策だな。安心しろ、狙撃手がしつかりしてれば死ない。
だが、重要な役どころだからな」

今のいすみの心は限りなく真っ白だ。

その心に他の考えが入り込む余地などない。

そもそも何も考えていないのだから。

いすみは自分におどりおどりの髪が刺さり、血を抜かれているのも
気にせずに走り続ける。

下へ下へと山道を下って行く。

朝日の色が段々濃くなつていぐ。

夜明けだ。

いすみはついに山道を抜けた。

と、同時におどりおどりの体から一際多めに血が流れ。

直感で直哉の狙撃であるといすみは呟つた。

すぐ近くに自分がいるのにどうおどろいてのみ的確に弾痕が刻まれていいく。

いすみは直哉を採用して良かつたと、心の底から思い、すぐに刀を引き抜き、狙撃の邪魔にならない場所によろけながら離れて行つた。

「では、問題だ。現在の状況で一番威力の高い武器は？」

佳奈が元気よく答える。

「龍樹のショットガン！！」

流華が佳奈に軽蔑の念を込めて、視線を向ける。

そして、わざと大きなため息をついて口を開く。

「この猿、馬鹿だね。ショットガンって言つてもソードオフタイプだから威力は半減してるじゃん。
相手が人間ならまだしも妖怪だよ？ソードオフってだけでかなり効き目は違つよ。恐らく狙撃銃じゃない？」

「誰が猿つて？この、吸血鬼！」

佳奈は人間様だぞ？」

「あらやる気？」

佳奈と流華は互いに睨み合っていたが、龍樹がすぐさま止めに入る。

「落ち着けって。どちらも不正解だ。
この中に『3つの凶器』ってミステリを読んだことがある人はいる
か?」

全員、黙り込んでしまった。

龍樹が頭を搔きながら、口を開く。

「当然か。まあ、俺の場合もミステリ好きの翔良に薦められて嫌々
読んだだけだからな。

ある男が死んだ。その男の死体は体中傷だらけでめちゃめちゃだっ
た為、凶器の特定が困難だつた。

凶器の候補に挙がったのはナイフ、ロープ、拳銃の3つ。
で、結局その男を殺した凶器つてのは……」

流華は素早くおどりおどりへじ、おどりおどりの体を跳ね上げ、真上に投げた。

空を飛ぶおどりおどり心なしか狼狽してこんな風にも見えた。

最も表情の変化など見受けられなかつたが。

おどりおどりの体を硬いコンクリートの道路との間に地獄から落とした。

トマトが潰れた時のよつた生々しこ音と共に悲鳴を上げた。

「効いてるーー。」

「分かってる。まだ油断するな」

龍樹は空に向かって933パラベラム弾を3発続けて発射した。

この行動は直哉への狙撃中止の合図である。

龍樹は至近距離でおどりおどりに12ゲージ弾を浴びせた。

右腕に包帯が巻かれているからかスライドを下げるにも少し時間がかかる。

零治はG-1の残弾で、佳奈は龍樹から投げ渡されたグロツクでどうおどり攻撃を続ける。

「流華、おつかれ！」

流華はわざわざと回り、腰領でおさげをした。上へた。

が、おどりおどりは生命の危機を感じたのか流華へと髪を突き立てる。

おどりおどりの髪に血液が流れ始める。

「残念でした。吸血はあたしの専売特許なんですよ」

流華は田を輝かせ、おどりおどりの髪に齧り付く。

おどりおどりは田をカツと見開いた。

流華はおどりおどりの体の血液を全て吸こぼすかのような勢いで血を吸い始めた。

このままでは先に血を抜かれ、殺されるのは自分だ、とおどりおどりは本能的に悟り、髪を流華の肌から引き抜く。

しかし、その隙を突いて流華はおどりおどりを真上へと投げた。

本日、2回目の不快な破裂音。

おどりおどりには最早戦意の欠片も残つておらず、その場に崩れ落ちた。

そこにも躊躇いなく銃弾を撃ち込む。

やがておどりおどりは痙攣を続けるだけの肉の塊になつた。

しばらく静寂が流れたが、龍樹が一同にそつと告げた。

「弾残つてゐる奴、手挙げろ」

佳奈がそつと手を挙げた。

「ちよつぢゅう発残つてゐる」

龍樹は佳奈にニヤリと笑いかける。

「じゃあ、ヒジメナ本田の名狙撃手に頼むか」

佳奈もすぐこの意図を察し、空に向かつて3発撃つた。

その行動は狙撃再開の合図だった。

吸血鬼（1-1）～帰還～

いすみはベッドの上でゆっくりとの田を開いた。

まず左腕に違和感を覚えた。

これは点滴が刺されているからだらう。

そして、天井を見つめる。

いすみは「こは翔良の地下帝国だと思っていた。

しかし、あそこの天井の色は茶色なのに対してもこは白色だ。

「こは？」

「飯島病院です」

意識せず口に出した疑問は若い女性の看護師が答えてくれた。

看護師は余程退屈だったのかいざみが起きたと知るや否や饒舌になつた。

「どうも、私は看護師の上田です。
危なかつたんですよ？この4日間。

血が足りなくて生死の境をずっと彷徨つてたんですよ。
まあ、それもあの吸血鬼の女の子のお陰ですね。彼女がすぐにここまで運んでくれたから貴方は一命を取り留めたんですからお礼言つておいた方が良いですよ」

「はあ、そうですか」

「でも、皮肉な物ですよね。妖怪が貴方達を助けるなんて」

「まあ・・・・・」

「それにしても吸血鬼って案外普通な感じなんですね。
もつとドラキュラみたいな感じのマントでもしてるとと思いまし

たけど

尚も止みやうにない上田の話をいすみは苦笑しながら聞いていた。

「と、言ひ訳で今日から補充要員として監の仲間になる鬼頭流華です……」

「ああ、うん」

流華の元気な自己紹介にも耕治は興味を示さない。

「こ」は補充要員専用の部屋である第一会議室。

流華は龍樹の懇願もあり、射殺は免れたが、N?の監視下に置くためには強引に補充要員をすることになったのだ。

「ちよつと耕治くん、もつとテンション上げて〜よ」

そつ言つて、流華は机を力強く叩いた。

と、同時に机は音を立てて壊れた。

まるでハンマーか何かで叩き割れたかのような砕け方だった。

「おこ・・・・・弁償しろよ」

ぶつきら棒に耕治はそれだけ言った。

それに対しても流華は壊れた机を見てため息をついた。

「全く、何でこうなるのかな・・・・・・」

「力入れ過ぎただけだろ」

耕治の冷たい態度に流華は沸々と怒りが湧いてきた。
「そういうば、他のメンバーは?」

「お前と俺で全部

「これだけ?」

「それが?」

ついに腹を立てた流華は傍にあったペンケースを投げつけた。

ペンケースは恐ろしいスピードで耕治の背後の壁に叩きつけられた。

耕治が絶叫する。

「殺す気か！？」

「確かにちょっと殺意湧いてたかも」

流華は平然と言つてのけ、耕治に質問する。

「てか、何でそんなに冷たいの？」

「誰が妖怪と好き好んで仕事なんかしたがるんだ？」

今度は鍔が飛んだ。

鍔は壁に突き刺さつた。

その日以降、流華と耕治は一緒に部屋に集まらせてはいけないと決まりが出来た。

龍樹は翔良の地下帝国にいた。

「で、用件は？」

龍樹は台所で「」を作っている翔良の背中に問う。

「その1、Fake mixとザヘルが完成した」

「お、サンキュー。どうあるへん？」

「俺の机。

あ、ついでにそこには集金袋あるからそこに金入れておいて」

龍樹は翔良の机の一一番上の引き出しを躊躇いなく開ける。

そこにはたのは銃弾ではなく、恐らく違法であろう「ポルノ雑誌」だった。

「翔良…………お前、そんな趣味があつたのか」

「何の話でしょうか、お客様」

「雑誌だよ、雑誌」

「ああ…………一時的にね、預かってるんだよ。
やつぱ銃売るだけじゃ食つてけないからね。」

「副業みたいな物」

「じゃあ、この葉っぱもか?」

龍樹は何故か花瓶に活けてある見た事もない植物を手に取る。

「当たりー。結構、儲かるんだよ。」

色々預かつたり育てたりするだけで、そこそこ。

それと弾は上から3番目」

龍樹は本来の目的を忘れるところだった。

上から3番田の引き出しには確かに7つの弾丸が入っていた。

内6つの弾頭はクリーム色だが、1つだけ赤い弾頭が混じっている。

龍樹は集金袋に金を入れると、7つの弾丸をしばらく愛おしそうに見つめ、ポケットにしました。

そして、耕治は続ける。

「その2、現在の状況をどう思つ?」

「どうって言われてもな……お、悪い」

耕治は龍樹の傍にココアの入ったカップを置く。

そして、龍樹の向かいに座る。

「だつてよ、ゴブリンに七人ミサキにかまいたちがおどりして、おまけに吸血鬼ときたらどう考へてもおかしいだろ。それが同じ地域に立て続けに

「まあな。でも、原因は？」

「それが分かれば苦労しないよ」

龍樹は「」にんじと口を付ける。

まだ熱かったので少しだけ口に含み、カップを置く。

「」の「」売れば儲かるんじゃないのか？」

龍樹はふとそんな疑問を口にした。

実際、翔良の作る「」は絶品であるとの間では言われている。

「それは考えた事なかつたな。・・・・・・検討してみよう」

翔良はその案をすぐにノートに書き留めた。

書き終えると、翔良は三度口を開いた。

「その3、剛太先輩が帰つてくる」

「剛太先輩が？」

龍樹は思わず立ち上がりてしまった。

それだけ驚くべきことだったからである。

飯島高校N?最後の1人三島剛太という男は風来坊のように日本各地を転々としている。

しかも彼はひどく面倒臭がり屋で便りは少ない。

その為、彼らの連絡は希少価値が高い。

「ああ、これは確実だ。

向こうからの約2カ月振りのメールだ」

龍樹は耕治の携帯の液晶を後ろから覗き込んだ。

そして、田を見張った。

姑獲鳥（一）～三島剛太～

「レーティースアンデジョントルメーン、今日は『』の今井翔良の地下帝国にお集まり頂きあつがおどりござれこまかー。」

翔良はこつもの商売口調でさりげなく頭を下げる。

これで彼の服装が黒のタキシードとまでなつた『』の部屋は欧米の金持ちのパーティと見間違つほどであった。

いつもの乱雑に物が置いてあるだけの翔良の部屋は色とりどりのテープや万国旗、そして壁の至る所に掛けられている観賞用の銃などで非日常を演出している。

しかし、『』の部屋の主である翔良の格好は変わらない。

制服の上から以前のエプロンを着てこる接客の際の格好である。

「では、これより私今井翔良の誕生日会を始めたいと思ひますー。」

流華の大きな歓声だけが翔良の言葉に答えた。

他のメンバーは理由は違えど皆あまり今回の誕生日会に乗り気ではなかつた。

誰が合図したわけでもなく翔良は隣の部屋とこの部屋を往復し、食事を運び始めた。

事前にこの誕生日会の参加者には割り箸とプラスチックの皿が配られており、バイキング形式で食事をしてもらおうというのが翔良の考えだつた。

この誕生日会には現在入院中のいづみは当然参加していない。

そのことでもさく落胆しているのは零治である。

彼はパーティと聞いて上から下まで新しいものに買い替えたらしいズボンにもシャツにも皺ひとつない。

しかし、この服装を見てくれる人物がないのでは意味が無かつた。

「流華ちゃん」

「んー？ どうしたの？」

零治の作った声に対する流華の反応は薄かつた。

「悪いが僕は外で食べてくるよ」

「えー、折角良い物出でくるんだから食べてきなよ」

「いいわ。それに多分この企画の真相は翔良の誕生日会なんかじゃない」

流華が「え？」と聞き返した時には零治は既に彼女に背を向けていた。

実際、彼のカソは当たっていた。

だが、そんなことは裏・風紀委員の仕事の日がまだ浅い流華、直哉、耕治の3人には分かるはずもなかつた。

その中の一人、直哉も零治と似たような理由で落胆していた。

その様子を見かねて龍樹は声をかける。

「大丈夫か？」

「何で・・・・・何で佳奈先輩来ないんですか？」

消え入りそうな声で直哉はそう言つ。

「確認くらいしとけよ。

大体、あいつは俺以外のN?、特に翔良と委員長を田の敵にしてる
んだからよ」

「え、俺その話知りませんよ」

龍樹は口を開きかけていた。

しかし、翔良から浴びせられる刺すような視線を感じ、閉口した。

それを見て翔良は安心しきつた顔で微笑み、料理を口にした。

それから一回まじめなく食事と談笑を楽しんでいた。

突如、ビートもなく調子はずれの歌が聞こえてきた。

歌詞から察するにそれはビートや音楽の分類上ハードロックにあたるものであることが分かった。

流華と直哉は謎の歌声がだんだん近づいてくるのに気がつき、警戒を強めた。

それに対して龍樹や翔良は随分と無防備だった。

耕治は自分が銃の扱いに慣れていないことは分かっていたので後ろに下がった。

部屋の明かりに照らされたついに声の主は姿を現した。

直哉がまず最初にその声の主に感じた印象は大きいのは歌声だけではなかったということだった。

身長は優に180cmを超えており、肉付きの良い男だった。

もう秋がすぐそこまで来ているのに上はランニングシャツ、下はジーパンといった出で立ちで、風邪を引かないのだろうか。

髪も髭も手入れがされておらず伸びきっており、右手に何か筒のような物を手にしている。

その筒から視線を筒を持つ右腕に移すと、そこに龍のタトゥーが彫られていることに気付く。

男はもうほとんど消えかけている煙草をジーパンのポケットにねじ込み、黄色い歯を見せて笑った。

男がベースモーカーだと「う」とは一目瞭然だった。

「龍樹先輩」

直哉は声を落として龍樹に話しかけた。

「どうした？」

と、龍樹は緊張感など微塵も感じさせないような口調で聞き返した。

「どうしたじゃないですよ、誰ですかあれ？」

早く銃抜いた方が

「その必要はねえよ、兄ちゃん」

ありもしない方向から聞こえた声に直哉は短く悲鳴を上げ、声のした方を振り返った。

男は足音一つ立らずに直哉のすぐ傍まで移動していた。

直哉は恐怖を感じ、龍樹の制服のズボンのポケットに入っていたグロツク17を奪い取り、男に照準を合わせた。

「あ、あんたは誰だ？何しに来た？」

上ずつた声で直哉は男に尋ねる。

男は答えた。

「俺か？」

俺の名前は三島剛太みしま こうた。飯島高校の3年、N?だ」

「三島・・・・・剛太？」

直哉はその名前に聞き覚えがあつた。

必死に思考を巡らせ、それがいつだつたかを思い出す。

あれは確かあいさつ回りの時だつたといつ結論に直哉は辿り着いた。

「つて」とは、あなたが最後の一人の・・・・・

「そりゃうとになるか」

言い終えると剛太は豪快に笑った。

ひとしきり笑い終えると、剛太はぐるりと辺りを見渡した。

一人一人の顔を確認しているようだった。

「さて・・・・・知らない顔もいるが、皆いるな！
・・・・・いや、佳奈と零治といづみの野郎がいねえか。
まあいい、久しぶりだな！俺が帰ってきたぜ！」

そこで一度言葉を切ると、剛太は翔良に目を向けた。

「そりゃう。ここに来る前に一匹妖怪見つけたから殺しておいたぞ」

翔良は皿を白黒させた。

「それってまさか大ムカデじゃないですか？」

「あ？ 知つて放つておいたのか？ 趣味悪いなお前」

「あれはボディーガードとして置いておいたんですよ！ 何勝手に殺しちゃってるんですか！」

「でも素手で殺せたぜ？ あんな弱いの置いておいたって無駄だろ」

「先輩の素手と一個中隊は同義語じゃないですか！ 弁償してくださいよ、高かつたんですから」

「今、金無いんだよ。

北海道からここまで来るのに使つてしまつてさ・・・」

と、弁明するも翔良は今にも飛び掛かってきたその勢いである。

「なら仕方ないか

剛太は何の前触れもなく大きく跳躍した。

天井に頭が当たる前に彼は腕を上に大きく突き出していた。

拳と天井がぶつかる。

すると天井は音を立てて崩れた。

崩ってきた瓦礫でテーブルの上の料理はぐちゃぐちゃになり、壁の銃や万国旗も地面に落ちた。

「じゃあなー！」

剛太はそう言って上の階（学校の床）に飛び降りるとどこかに走り去つていった。

「逃がすかー！」

翔良も梯子を上って剛太を追いかけよつとする。

しかし、耕治が待つたをかける。

「ちょっと待てよ、今井！」

あの化け物よりお前は早く走れるのか？」「

翔良は鬱陶しそうに耕治を見やり答える。

「大丈夫だよ。あの人、力はあるけど馬鹿だから。
隠れる場所は大抵決まってる！」

それから翔良は梯子を上り始めたが、ふとこちらを振り返った。

「あ、忘れてたけど直哉くんと流華には新しい武器売つてあげるか
ら暇なら学校に残つてて。
1時間以内には戻るから」

それだけ言つと翔良も梯子を上り終え、走り去つていった。

姑獲鳥（2）～武器屋と少女～

ジュースが受け取り口に落ちる。それを手に取り、ブルタブを引っ張り、一気にジュースの半分を飲みきり、一息入れる。

今井翔良は辺りを見渡し、人知れずため息をついた。

走行距離はおよそ1・5km。

いつも地下帝国に閉じこもつて過ごしている翔良にしては上出来である。

結局彼は剛太を捕まえるには至らなかった。

体が火照ってきたので剛太の追跡は諦めてジュースでも買おうかと考えていた矢先にこの自販機が目に入った。

翔良はジュースの残りも飲みきり、屑籠へと空き缶を捨てる。

小休止を取ってしまったのでどちらにせよもう剛太は今日中には捕まえられないだろう。

そもそも剛太がどちらに逃げて行つたか翔良にはもう知る由もなかつた。

「商店街の辺りまでは豆粒程度だつたけどまだ姿が見えてたんだけ
どな・・・・・」

言い訳するかの如く翔良は呟いた。

だが、彼の隠れ家は決まつてゐる。
明日にでも候補地を探しに行こう。

翔良はこのまま帰るのも癪だつたので久しぶりの外の空氣に触れて
みる事にした。

幸いにもここからそつ遠くないところに娯楽施設は勿論の事、反対
方向に向かえぱちょっとした散歩道もある。

翔良は散歩道の方を選んで歩き出した。

しかし、彼は歩き出してすぐ元、公園の脇を横切る時に歩みを止め
た。

現在の時刻はちょうど6時を回つたところ。

子供たちとひっくり遊ぶのを止めて、自宅へと帰っているはずの時刻である。

そんな時刻だと、さうのに小学校低学年くらいの子供がたった一人でブランコに座っている。

漕いで遊んでいる訳でもなくただ座っているだけだ。

日が沈み、暗くなり始めた空とブランコに座る子供と一緒にスマッシュな組み合わせが翔良には不自然に感じられた。

翔良はさりげなく公園の敷地内に入り、子供の表情を確認した。

子供は少女であるという事が分かつた。

翔良は顔つきでそう判断した。

後姿だけなら髪は短いとも長いとも言えず、服装は近隣の小学校の指定のジャージだったので男女の区別がつかなかつた。

だが、顔を見れば性別など一目瞭然だつた。

ぱっちりと開かれた目、長いまつ毛、ほんのりと朱に染まった頬。他にも判断基準は沢山あつた。

「ねえ、お兄さん」

翔良は慌てて少女から視線を逸らす。

下手をすれば警察を呼ばれない程じりじりと少女を観察していた。

急いで逃げようかと思つたところに少女から質問を続けられた。

「お兄さんは何してますの？」

少女は無表情のまま尋ねる。

「俺は・・・・・・その散歩だ」

この年頃の子供と言うのは大人の想像を遥かに超えた鋭い勘を持っているものだ。

翔良の嘘など簡単に見破つてしまつた。

「嘘。だってお兄さん散歩するはずならわざわざ遊具の方に来なくても良いじゃない」

「休憩だよ」

「そこ」の自販機の傍でさつきまでジュース飲んでベンチに座つてたのにまた休憩？」「

「・・・・・・君みたいな小さい子がこんな時間までそこにいっちゃいけないよ」

「へー、お説教する為に来たんだ」

翔良はバツが悪そうに苦笑する。

そして、そのまま彼女の隣のブランコに座る。

「お兄さんがもしかして子供を攫う不審者?」

翔良は最近この辺りで起きている連続誘拐事件を思い出した。
犠牲者はついに6人目になり、妖怪の仕業では無いかとまで言われ
ている。

「いーや、違う」

「やつか。いつその」とあたしの事なんか攫つてくれれば良いのこ
な

「どうして?君が攫われたら君のお父さんやお母さんが悲しむぞ?」

「お父さんもお母さんも死んじやつた」

翔良は目を丸くして驚いたのに対し、少女は両親が死んだといつ
事実を話す時ですら口調も表情も崩さなかつた。

少女はそのまま淡々と語りだした。

「お父さんは妖怪に殺されちやつて、お母さんは後を追つて自殺。
それであたしは小学校で暮らすことになつちやつた」

「それつてまさか」

「あたし達みたいな子供のことを…？」とうつて呼ぶんだって」

翔良は体を大きく震わせた。

彼とて小学生に？が居ないとは思つていなかつたし、小学生？の話は何度か聞いたことがあつた。

しかし、実際に田にするのと話を聞くとの衝撃は違つた。

「お兄さんをからかおいつて言ひのかい？そんな都市伝説で」

「…………うそ。

からかおいつて言ひめんなやー」

翔良は驚きの色こもつゝ感じるものがあつた。

それはこの少女には絶対に自分の正体を明かしてほこけないとこつ緊迫感だつた。

少女がもし自分の正体を知つたらどうするか？

あとと同じ境遇を生きる仲間と認識して甘えてくるだらう。

それだけは避けなければならない。

少女の甘えによつてもしかしたら自分も少女から影響を受け、依存し合ひ事になるかもしない。

あるいは、仕事に支障を来すこともあり得なくはない。

翔良はつい口が滑つてしまつては無いかと不安になつていた。

「ねえ、お兄さん」

「今度は何だ？」

「さつきの続きだけでもしほんとに？みたいな人がお兄さんの田の前に現れたらどうする？」

「……………あ。

その時になつてみないと分からない」

翔良はブランコから勢いよく立ち上がつた。公園の時計で時刻を確認すると6時30分。およそ30分も少女といた計算になる。

「お兄さん、明日もここに来る？」

少女は初めて感情を含めた声で尋ねた。
その感情はおそらく期待だつと翔良は自分勝手な妄想をした。

「気が向いたら」

「あたし伊藤三月。3月って書いて三月。お父さんもお母さんも3

月生まれだったからこんな名前なの。

あたしは11月生まれなのに」

「俺は今井翔良。明日も来れるとしたらいの位の時間に来てやるから今日はもう帰んな」

翔良はやつて声で終えて後悔した。

自分でやつて口を滑らしてはいけないと決めていたのにその危険に何故わざわざ突っ込むよつた真似をしてしまったのだらう？

翔良はそつ思いながら一番近い地下帝国の入り口へと向かった。

「帰る家なんて無いんだけどね」

三月は翔良の去り際、小さくやつて呟いた。

姑獲鳥（3）～翔良の追憶～

1年前の事だった。

姑獲鳥はたった3人の高校生に追い詰められていた。

銀の翼をはためかせ、赤い大きな目で周囲に気を配る。

夜だと言うのに追手はこちらを平氣で追いかけている。

姑獲鳥の赤い両目は赤外線の様な役目を果たしており、夜でも生物の動きを正確に捉える事が出来る。

その両目で追手の現在位置を確認する。

「ひつ！」

姑獲鳥の目が彼らの姿を捉えると同時に、彼女はバランスを崩した。

理由は分かつている。

3人の追手の1人が持っている狙撃銃だ。

そのまま姑獲鳥は地面へと落下した。

しばし呻いていた姑獲鳥だが、追手の足音と話し声が近づいて

来るのに気がつき、慌てて身を隠す。

足音は姑獲鳥の隠れている茂みのすぐ近くで止まった。

「死体が・・・・無い？」

「おかしいな。確かにこの辺の気がしたんだが」

「どうするんですか。死体、或いはその妖怪の体の一部が無いと報酬は貰えませんよ？」

「んな事は分かつてら」

話しているのは拳銃、グロック17を持つている普通としか形容すべき言葉がない程特徴が無い少年と大きな狙撃銃を肩に担いでいる口調が荒々しい大男だ。

どうやらこの2人の関係は先輩と後輩のようなものであるらしい。

もう一人、色白の先程から一言も言葉を発しない少年はポケットの中の何かを右手で弄りながら周囲を見回している。

この少年はどうやら銃の類は持っていないらしい。

少なくとも右手はポケット、左手はゴーグルで塞がっている。

そのゴーグルが暗視ゴーグルというもので、自分の目とほぼ同じ役割である物だと姑獲鳥が知るのはもう少し先の話である。

「ん？」

大男が何かに気付いたらしく、狙撃銃を構える。

普通の少年も大男の動きを見て、グロツクに新しい弾倉をセットした。

「何匹ですか？」

ここに来て色白の少年が初めて口を開いた。

「3・・・・・4・・・・・5匹。」

身を寄せ合つて隠れてるみたいだな」

5匹の身を寄せ合つて隠れている何か。

姑獲鳥にはそれに心当たりがあった。

姑獲鳥には子供が6匹いた。

自分が追手から逃げている間、子供たちの行方は分からぬ。

しかし、日頃から子供たちに自分が居ない時にはどこかに隠れていろと教えたのは他でもない彼女だった。

普通の少年が隠れている5匹の元に一步一歩近づく度に、姑獲鳥の心臓は苦しくなった。

姑獲鳥にはそこに子供たちがそこに隠れているかは知らない。

しかし、直感的に彼女はそこに子供たちが隠れていると知った。

姑獲鳥の母性本能が目覚めた。

自分が派手に動けば少なくとも子供たちは助かるかもしれない。
そう思い、口を大きく開いた。

しかし、銀色の小さな羽がその口を塞いだ。

羽の持ち主は姑獲鳥の子供の中で長男にあたる子だった。
息子は母の口から手を放し、宙に浮いた。

3人の高校生の興味は今、他の子供たちが隠れている場所に向いて
いる。

長い間、一緒に暮らしてきた母と息子の関係だ。
姑獲鳥にはすぐに我が子の考えが分かった。

銀色の体躯が空を舞い、3人の高校生に向かって飛んで行く。

3人とも背後からの攻撃に面食らったようだ。

鳴り響く銃声、飛び交う奇声罵声悲鳴、そして舞い散る銀の羽。

色白の少年がポケットからようやく隠されていた物を出した。
それは姑獲鳥の予想通りの物だった。

辺りに爆風と破片が飛び散った。

「・・・・・翔良先輩、翔良先輩！！」

直哉の呼びかけで翔良はようやく我に帰った。
彼は良く赤いソファに座つて良く考え事をする。
それ自体は普通の行為なのだが、彼のそれはひどく集中して行う為、
辺りに注意が行き届かない事が多かつた。

今回も知らず知らずの内に長時間追憶にふけっていた。

「悪い悪い。ちょっと昔の事を思い出しててな」

「へー、翔良君の昔の事って何ー？」

流華が陽気に尋ねる。

「別に大した話じゃないよ。

1年前、妖怪を1匹取り逃がした時の話だ」

「でも、翔良先輩は現場に出向く事は少ないんじゃ？」
「その時は新しく作った破片手榴弾の威力を試したくてね、龍樹と剛太先輩に着いて行つたんだよ。

結果は最高だつた。5匹の穴倉に潜んでいた妖怪をぶつ殺したんだ

「その妖怪つて？」

「鳥の妖怪・・・・・そう、姑獲鳥だよ。

まあ、肝心の母親は取り逃がしちやつたんだけどね」

そう言つて、翔良は無理矢理笑みを浮かべた。

彼は昨日出会つた少女を思い出すと同時に1年前の姑獲鳥事件を思い出していた。

そして、今同じような事がこの辺りで起こつている。
間違いなく彼女だろ？。

翔良はそう思つていた。

この考えは既に剛太と龍樹にも伝えた。

しかし、どちらもまともに翔良の話など聞いてはいなかつた。

「考えすぎだろ。姑獲鳥なんてそういう中に『ゴロゴロ』くる妖怪だろ?
偶然だ偶然」

龍樹はそう言つていた。

「それより翔良君、あたし達に武器売つてくれるんじょ？」
早くしてよ」

「おつと、そうだつた」

翔良はすぐに2つの台車を運んできた。

その時には彼の顔は先程の無理矢理な笑みから自然な営業スマイルへと変貌していた。

2つの台車には流華と直哉にはぴったりだらうといつ考えを持つて
買つてきた銃が置かれていた。

「1Jの大きいのが流華の、こっちの短機関銃が直哉君のだ」

翔良は2人に自分の銃を指し示した。

直哉はその銃をえらく氣に入り、すぐに試し撃ちがしたいと言い始めたくらいだつた。

翔良は直哉に奥に射撃場がある事を教えた。

直哉はすぐにそつちへ走つて行つた。

一方の流華はと暫つと少し困惑していたようだつた。

「どうしたんだ、それじゃ不服?」

「いや、不服では無いんだけどさ・・・・・・あたし一応女の子ですよ?」

「それが?」

「だからこんな大きい銃普通女の子に持たせる!?
でも、流華は男か女とか以前に妖怪だろ?
君ならそれも使いこなせるよ」

流華はあまり納得してはいなかつたようだが、渋々銃を買い取り、直哉と同じように射撃場に向かつていつた。

姑獲鳥（4）～情報収集の天才～

翔良の足はいつの間にか公園の方に向かっていた。

彼自身、もうこれ以上三円と話をしてはいけないという事を頭の片隅では自覚していた。

しかし、頭で理解してこらだけで体は叫ぶ事を聞かなかつた。

「やあ、三円ちゃん」

朗らかな声で翔良はベンチに座つている三円に声をかけた。
昨日と同じく服装は学校指定のジャージだった。

「…………氣持ち悪つ」
「おいおい、折角来てやつたんだ。そんな態度は無いだろ?」
「…………何だか昨日よりも親しげだね」
「お互いの名前を知つている、それだけで十分だろ?
さあ、俺の事を翔良お兄さんと呼んでみな!」
「絶対嫌」

短いやり取りを終えて翔良は三円の隣に座つた。

そして、何をするでもなくお互い空を眺めた。

夕闇の中に一番星が輝いていた。

一番どころか他にも2つ3つ輝く星が確認できた。

お互い会つたは良いが、何をするか何について話すか等全く考えて

はいなかつた。

でも、これで良いのかもしないと翔良は密かに思つていた。

翔良が自分が△？である事を暴露したら。
お互いの境遇について語り合い、慰め合つてしまつたら自分はこの少女を常に手元に、もしかしたら引き取るといつ考えまで浮かんでもまづかもしねり。

翔良が危惧していたのは△円でも△？の仕事の精度でもなく、自分の身だった。

それ程までに翔良は依存の恐怖を知つていた。
だが、恐らくこれからも△円と会うのだろう。
こんな風に星を見て、思い出した事があればそれを口に出す。

「・・・・・喉、乾かね？」

「少し」

「何が良い？」

「何でも」

翔良は立ち上がり、自販機に向かつて歩き出した。

コーヒーとサイダーを買ってベンチに戻つた。

三月は先ほど翔良が立ち上がつた時の体勢から寸分狂わずそのままだつた。

「まじ

翔良は三月にコーヒーを手渡した。

「…………普通逆じゃない？」

「何が？」

「普通あたしにサイダーじゃない？」

「三月ちが良かったならそいつ言えよ」

翔良は三月と飲み物を交換した。

翔良は既にサイダーに口を付けた後だったが、三月は特に気にせずサイダーを一口飲んだ。

「…………まずい」

「せうか？普通だったと思ひやどな」

「きつとお兄さんのエキスが付着してグロまづくなつたんだ、そうに違ひない。やつぱり『コーヒー』に替えて」

「全く…………親の顔が見てみたい」

「だから親はいないんだってば」

翔良は再び三月と飲み物を交換した。

三月はブラックの『コーヒー』を飲んで、顔をしかめた。
しかし、もう交換を頼むことはなかった。

翔良がそろそろ帰らうかと立ち上がった時だった。

「待つて」

三月は翔良の制服の裾を掴んだ。

「どうした？」

「お給料。あたしの暇を潰してくれたから」

そう言つて三月はランドセルから出した物を半ば強引に翔良の手に握らせた。

翔良がお礼を言つのも待たずに三月は走り去つていった。

翔良が夕方公園に出向く習慣が形成され、5日が過ぎた。

だからといって彼のライフスタイルは一向に変わらない。

他のノーツ回りように朝早くに起き、朝食を済ませ、梯子を伝つて校内に出る。

しかも翔良の場合、他のノーツより20分遅く起きても始業ベルが鳴るまでには教室に着く事が出来る。

授業を受け、昼休みと放課後には一度自分の地下帝国に潜つて非法な商売を行つ。

その商売も顧客は主に学生（古い銃好きなマニアや一部の教師も今井銃器店のお得意先でもあるがその数は少ない）なので、遅くとも8時には切り上げる。

勤務時間の合間に縫つて、銃の制作を行つ事もあった。

その間は信のおける飯島高校の学生に金を握らせて店を任せていた。

その事は周知の事実だったので、その時間で翔良が三月に会いに行つても何ら不自然ではなかった。

しかし、どんな物事に対しても完全と言つてしま葉はいつだって不完全だ。

「今井さ、最近公園で何してんの？」

翔良はココアをかき混ぜる手を止めた。

質問の主は一宮耕治。独自の広大な情報網を持つと自負している少年だった。

実際、翔良も心の底ではいつかはバレるとは思っていた。

そして、一番最初に自分の秘密に気付くのは耕治だと思っていた。

田の前で漫画雑誌に田を通しながらも指で机を叩いてココアを催促する少年に翔良も最初はペテン師的な印象しか受けなかつた。

しかし、耕治の情報網の片鱗を田の当たりにして考えを改めた。

「どこからそれを？」

「公園で飯島小学校の女子児童を連れ去りうとしている不審者がいるって写メが届いてさ。後ろ姿がお前そっくりだったから」

どこに行つても翔良は誘拐犯としか見られないらしい。

「撮られてたのか」

「世の中には色んな天才がいる。

盗撮の天才とか気配を消す天才とか」

お前は情報収集の天才か。
と、翔良は心の中で呟いた。

翔良は耕治の前に「ココアを置いた。

耕治がココアを一口一口、味わって楽しんでいるのを見た時に翔良は
一つの果実を切った。

綺麗にそれを皿に盛りつけ、机の上に皿を置く。

「何これ？」

「林檎」

「それは分かつてるけど、どうしたの？」
「さつき言つてた幼女から貰つたんだよ。話し相手になるつて仕事
の給料だとよ」

「成程」

切り分けられた林檎の内の一つに爪楊枝を突き刺し、それを口に運
ぶ。

林檎は全くパサパサしておらず、程よい硬さで咀嚼するとシャリシ
ヤリと気持ち良い音がした。

耕治は5分もしない内に林檎を食べ終えた。

翔良は耕治が最後の林檎の咀嚼を終えたのを見計らつて尋ねた。

「で、結果は？」

「あまり大した情報は手に入らなかつたかな」

耕治は何枚かの写真を翔良の目の前に差しだした。
翔良は全ての写真に目を通した。

「どの写真もボケていたが鳥の姿が写されていた。

「もっと鮮明に写っているのはないのか？」

耕治は大袈裟に肩を窄めた。
だが、その行為に落胆の意は感じられなかつた。
どうやらかといふとおどけた調子だつた。

「ここには写真の天才がないもので。
これなんか結構マシだと思うけどなー」

耕治の指差した写真是木の上に止まつてゐる鳥の写真だつた。

しかし、やはりボケてしまつてゐる。

「これだけでこの辺りに姑獲鳥がいるって事を証明できやうか？」
「難しいだろ？ね」

翔良はがっくりと頃垂れた。

耕治の得意分野は情報収集であつて、元からある情報を仕入れてくれるのが得意なのだ。

それをまだあるかどうかも分からぬ姑獲鳥の情報を仕入れてこいというのは無理な話だ。

翔良は気分を入れ替えて、ソファから立ち上がった。

「どこ行くの？」

「例の小学生の所」

耕治は追いかけては来なかつた。

見つけた。見つけてやった。

今までどれだけ私は怒りを溜めてきただらう？

どれだけの恨み言を呴いてきただらう？

だが、ついにこのどうしようもない気持ちを発散できる。

あの日、子供たちをバラバラにした少年に復讐【】すること。

あの少年は子供たちをバラバラにし、その肉片を持ち帰った。

少年はあの時、あろうことか笑っていた。

遠目からでも良く分かつた。

自分の作った手榴弾の威力に酔いしれ、歓喜していた。

どうしても許せなかつた。

どうしてやろうか？

ただ普通に殺すだけじゃつまらない。

あいつの大切な物を奪つてやろう。

我が子を奪われた私と同じように

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0526q/>

魔弾の射手の弾丸は何処に？

2011年12月20日14時47分発行